
二つの歯車

愛田雅

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

二つの歯車

【Nコード】

N9334B

【作者名】

愛田雅

【あらすじ】

障害をもつ兄を治してくれないことから、医者をもひどく嫌っている杏が、入院することになった。医者も病院も嫌っていたのだが、主治医と恋に落ちてしまう。しかし、杏と主治医は決して結ばれてはいけない関係だった。それを知っても惹かれあう二人の運命は・・。

動き始めた歯車

パン屋の前には、必ず我慢ができなくなるほどのいい香りが漂っている。

店内から、ショーウィンドウの外を見ると、手にスーパーの袋をぶら下げた中年女性が歩いていた。その女性は、パンの匂いに誘われたかのように、迷わず店内に入ってきた。

すぐにトレーを手にもち、早速パンを物色し始めた。

このパン屋で働いている私は、焼きあがったばかりのクロワッサンを空いているクロワッサンの棚に置いた。

「焼きたてのクロワッサンです」

どのパンでも焼きあがるたびに、店内にいる人に、必ず案内をする。焼き上がりのパンは、大人気で、焼き立てのパンを狙っているお客もいるくらいだ。

さっきの女性も、クロワッサンをトレーに乗せていた。

私たちのパン屋は、クロワッサンが目玉商品だ。平日でも、午前中にトレーが何度も空いてしまう。

お昼前の今の時間帯は、必ず焼きたてのクロワッサンが出てくる。そのせいか、この時間帯は数人のお客が大体いる。

正午を過ぎると、近所のOLや、主婦、学生、サラリーマンなどが、こぞつてやってくる。店内は、少し広めなので、たくさんの人でにぎわっても見辛いということはないようだ。お昼のパン屋は、戦争だ。それはお客にとっても、私たち店員にとってもだ。

販売員である私よりも、奥にいる作業員の方がずっと大変だろう。このパン屋の作業員は、みな、何かの障害を負っている。私の兄もその中の一人だ。

お昼の時間帯になると、私は休むまもなくパンを運ぶ。焼きそばパンにカレーパン、卵サンドにツナサンド。どれも飛ぶように売れていく。

今日も、一時を過ぎると、はす向かいにあるYクリニックの院長たちが、私の勤めるパン屋へと足を運ぶ。Yというのは、八雲の略だ。院長の名札には、ちゃんと『八雲』と書かれている。

恰幅のいい院長は、クリニックの女性たちと一緒に、楽しそうに毎日のように、このパン屋に来ては、クロワッサンや、焼きそばパンなどを買っていつてくれる。院長とは対照的にほっそりとした店長は、うれしそうに院長と会話をよくしている。

「今日も焼きそばパン？好きですねえ」

こんなことを店長が言っていると、院長はニコツとして、

「ここの焼きそばパンは、本当に美味しくてね。毎日食べたいくらいだよ」

毎日、同じような台詞を返すのだった。その会話を私はレジで、聞きたくなくても聞いてしまう。他のお客の接客をしていても、なぜか院長たちの会話が、耳に入ってしまった。上得意様ではあるけれど、私はどうも好きにはなれない。八雲と言

えば、私の中にある嫌な記憶をよみがえらせるから。

八雲という名は、私たち家族と密接な関係がある。Yクリニックの院長は、噂話で聞いたところによると、八雲大付属病院の院長と兄弟であるらしい。八雲大付属病院、思い出したくない名前だ。

なぜ、私が、医者嫌いなのか。理由は、私の兄にある。兄を悪者にするわけではない。医者が、兄を治してくれないからだ。

私は、医者が嫌いだ。

医者嫌いの人は、世の中にも多いだろう。その理由はさまざま、怖いとか、注射をされたくないだとか。私の医者嫌いの理由は、全く違う。

兄は、生まれつき体に麻痺を持っている。手や足をまっすぐに伸ばすことができない。知能にも全く問題がないわけではない。

医者は、兄に何度か手術を試みた。幼い私は、兄が手術をすると聞いては、兄が私と同じように足も手もまっすぐに伸ばすことが出

来るようになる、信じてこんでいた。兄は、あまり手術をしたがらなかつたみたいだけど、私は、兄の手術にはいつも大歓迎だった。まだ、私が小さかつたこともあって、無邪気に兄の手術を喜んでいたらしい。あまり詳しくは覚えていないけれど、両親や兄は口をそろえてそう言っていた。

毎回、手術が終わると、決まって、兄の手足がまっすぐになることを期待して、家族そろって兄の病室に行った。正確に言うと、私だけがそれを期待していた。

病室に入ると、決まって兄はベッドに横たわっていた。手術直後で、麻酔が効いているのだから当たり前だが、幼い私はそれをおもしろく思っていたようだ。

ぐっすりと眠っているような兄の手足は布団に隠れて見えないけれど、私は、きっと、布団の中では、手足をまっすぐにぴんと伸ばしているのだろうと、わくわくしていた。兄が退院したら、公園で思いっきり鬼ごっこをしよう。色鬼でも何でも良い。兄と一緒に駆け回って遊べるんだと期待をしていた。

しかし、その願いは、いつもすぐに消し去られた。兄が目覚ますと、私は必ず夢物語から悲しい現実に叩きつけられるのだった。

ドキドキしながら、兄の手足が布団から出てくるのを待っていると、目を覚ましたばかりの兄が目の前にいる私に手を差し出してくれた。その腕は、まっすぐではなかった。

兄の手足は、手術前よりましになっただけで、決してまっすぐになることはなかった。私は、手術が終わるたびに、医者に文句を言っていた。

兄の病室に医者が入るなり、私は医者の足にしがみつき、「うそつき！ どうして、お兄ちゃんを治してくれないのよ！」

決まって私は、医者の足にすがりつくように、泣きながら訴えていた。

私の言葉に、医者は困った顔をしていた。

医者は、しゃがみこみ、私と目の高さをあわせて、いつも私に優

しく語りかけてくれた。

「お兄さんの病気は、完全には治らないんだよ。手術をしても、杏ちゃんと同じような体にはなれないんだよ」

何度も同じ言葉を、医者は私に言ってくれた。その言葉を私は、ずつと理解することが出来なかった。なぜか、その言葉だけは、私の耳にこびりついてはなれることはなかった。今でも、鮮明にそのシーンを記憶している。そして、そのときに思っていたことも鮮明に記憶している。絶対に、兄は治ると。

私も兄も成人した今、兄は障害者が多く働くパン屋で、楽しくパンを作っている。私も一緒にそのパン屋で働いている。

私が短大生のころ、すでに兄はそのパン屋で働いていた。兄の勧めもあって、私は、バイトとしてそのパン屋で販売員をしていた。週に三回、そのパン屋でバイトをしていた。兄は、週五日勤務で、私がパン屋に行くと、必ず兄がパン屋にいた。兄の姿を確認すると、ホッとするのは今でも同じだ。短大を卒業すると、そのまま従業員としてそのパン屋にとどまることになった。

就職活動をはじめようと思っていた頃、店長に、このまま従業員として残らないか？ と言われて、私は喜んで引き受けようと思ったのだ。しかし、念のために両親に相談しようか？ と思ったけれど、同じパン屋で働いている兄に真っ先に相談してみた。兄は、杏が決めることだと言った。そして、両親も同じことを言うだろうとも言ってくれた。私は、自分で考え、自分だけで決心した。

私が、兄のパン屋で働き続けることにしたと両親に言うと、とても喜んでくれた。そのとき、私の判断は、間違っていなかったんだと確信した。それまでも、進学のために自分で全てを決めていた。しかし、進学ではなく、就職を自分だけで決めることに不安があった。今では、あのときの自分の判断は正しかったと胸を張って言うことができる。

兄は、すでに結婚して、独立している。奥さんは、看護師だ。出

会いは、もちろん病院で、兄の看護をずっとしてくれていた人だ。二人の様子をずっと近くで見ている私は、二人がとてもお似合いだと思い続けていた。もしも、願いがかなうのなら、兄と看護師さんを結び付けて欲しいと切望していた。

兄から、その看護師さんと結婚したいという話を聞いたときは、肩の荷が下りたような安堵感と、長年の思いが実ったと言うつれしさでいっぱいになった。

しかし、喜ぶのもつかの間、奥さんのご両親は、この結婚に猛反対をした。絶対に許さないと。理由は一つ。兄の体にあった。当時の兄は、諦めることなく、絶対に結婚を許してもらおうと意気込んでいた。そして、兄の熱意に屈した形で奥さんのご両親は、この結婚を許してくれたのだった。

結婚を許した今でも、奥さんのご両親はあまりよく思っていないらしい。兄たちの強い気持ちに押されて許しはしたものの、兄夫婦が奥さんのご両親に会いに行くと、いつも兄のことを冷たくあしらっているそうだ。そのことを、兄の奥さんは申し訳なくて仕方がないと、何度となく、私に話してくる。

兄の奥さんのご両親の気持ちは、わからないことはない。それが当たり前なのかもしれない。

しかし、兄夫婦は、幸せに暮らしている。共働きで、すれ違ふことが多いいけれど、幸せそうな様子は、手に取るように伝わってくる。二人がそろっている姿を見るたびに、羨ましく思うほど、二人は本当に仲が良い。兄の体を支える奥さんの顔は、いつだって充実感に満ちた笑顔であふれている。

兄夫婦は、私たち家族の住む実家から歩いて五分もかからないところに住んでいる。何かあったら、すぐに駆けつけられることが出来るようにそうしたのだ。兄の奥さんのご両親が反対していることもあって、私と両親の住む実家の近くに家を借りることにしたそうだ。私も家探しには、協力した。兄と奥さんと私の三人で不動産屋を何件か回ったことを、楽しい思い出として、今でも容易に思い出すこ

とができる。当時は、まだ短大に通っていたこともあって、家探しのときは必ず私も一緒に回っていたのだ。

兄の体のことを考えて、マンションでもアパートでも一階を希望した。そして、実家の近所であること。それ以上のことは、あまり細かく指定はしなかった。兄は、杖があれば歩くことができる。バリアフリーである方がいいけれど、決して段差がないところだとか、水道の蛇口を回さずに上下に押すだけですむとか、そこまでする必要はなかった。

実家の近所の物件を何件か回って、一番実家から近い物件に決めたのだった。実は、兄の家が実家から近いところにした理由はもうひとつある。

兄と私は一緒に通勤している。毎朝、私が兄の家に迎えに行き、兄と一緒にパン屋へ向かう。お互いの家が近いほうが、私が兄の家に迎えに行きやすいということも少なからず考えてあった。家を探しているときに、誰もそこまで言わなかったけれど、誰の頭の中にも浮かんでいたことだろう。

兄と二人、パン屋へは、バスで行く。毎朝、毎晩、同じ時間のバスに乗っているの、バスの運転士も兄のことを知っている。シフトで、朝からだったり、昼からだったりすることはあるけれど、同じ時間のバスを使うので、バスの運転士は、兄のことをいつも優しく見守ってくれている。

兄は、杖を使っていて、バスに乗るのに少し時間がかかる。中に入ってから、杖が他の乗客にあたりそうになったことは、多々あった。

兄が、バスに乗り込むと、運転士は、いつのころからか、乗客に車内アナウンスをするようになった。

「お客様、通路は広くおあげ下さい」

アナウンスのあとに、兄の姿を見た乗客たちは必ず通路をあけてくれる。そして、いつも必ず空いているシルバーシートに兄は腰をおろす。

私は、兄の正面に立ち、降りるときには私がボタンを押す。パン屋へ行くだけで、大変ではあるけれど、何年も続けているので、もう慣れてしまった。

今思えば、私と一緒に通う前は、兄は一人で通っていたんだ。そのときは、どうだったのだろうと、たまに考える。いらない心配だとは思うけれど、なぜか考えてしまうのだ。

兄は、みんなからとても慕われている。私も慕っている。明るくて、話していても楽しいのだ。パン屋の仲間もいつも兄と楽しそうに話をしている。店内から奥の厨房を羨ましく何度も見てしまうのだ。私の視線の先には、兄がいる。生き生きとパンを作りながらたわいもない話をして、みんなを笑わせている兄の姿が。

兄がパンを作り、私はそれを売る。同じパン屋とはいえ、兄とは違う場所で働いているのだが、よく私の耳に兄たちの話し声が聞こえてくる。その声は、いつも明るく楽しそうだ。それを聞くと、私まで心が豊かになれるのだ。

閉店後、私と兄はすぐにパン屋を後にして、家へと急ぐ。

今日も普段と変わらず、すぐに帰ることにした。今日は小麦粉の特売があるので、スーパーによりたいと、兄に伝えると、大喜びでスーパーに行くことを承諾した。

兄は、小さいころからスーパーが大好きだった。ひとつの店で、いろいろなものが買えることを魔法のようだと表現していた。私は、その表現がとても好きだ。ロマンチックな感じで、私もスーパーに行くたびに、魔法を使ったかのように、スーパーでの買い物を楽しんでいる。

バスを降り、家とは違う方向にあるスーパーへと急いだ。

電灯があるから良いけれど、外はとても暗く、一人ではちょっと怖いくらいだ。兄と一緒にいてくれて、本当によかったと、一人心

の中でつぶやいた。隣を歩く兄は、そんな私の気持ちを全く察してはいないようだ。

「お兄ちゃん、もう真っ暗だね」

「そうだなあ。早く行って、早く帰ろう」

兄は表情ひとつ変えず、懸命に杖をつきながら歩いた。私が、話し掛けた意図を気づいてはいないのだ。その方が、兄らしい。さばさばしているのが、兄の長所と言える。

私より兄は数歩先を行った。暗い夜道はとても怖いけれど、兄と一緒にいるから私はあまり怖く感じてはいない。だからこそ、慎重に行こうと横断歩道にぶつかるたびに、私は一時停止した。しかし、兄はそれが気に入らないようだ。

「こんな時間に車なんて来ないよ」

そう言っつて、兄は左右の確認もせず、横断歩道を横切っつていった。お気に入りのスーパーに行きたい気持ちはわかるけれど、兄にも慎重になつて欲しい。

確かに、暗くなる時間帯は人通りも少ないし、車だつて少ない。だからつて、全く車が来ないとは限らない。

仕方がないと半ば諦めながら私は、兄に引きづられるように前を行く兄を追つた。信号は赤だつたけれど、左右の確認もせずに行く兄を止めることもなく、私は兄に着いていこうと早歩きで横断歩道を渡ろうとしていると、

バーンッ

けたたましい音がした。私のすぐ近くで。鼓膜を突き抜けるような大きな音。私は、思い切りぎゅっと目を瞑つた。背中を丸め、死ぬほどおびえた。

「ううん……」

目を開けると、両親と兄夫婦が、私の顔を覗き込んでいた。みんな、深刻な顔をしている。その顔を見ていたら、私までぞくつとした。みんなの顔が青ざめていたので、棺おけの中に自分がいるような気がして、怖くなった。

みんなの顔と一緒に目に映っている天井を見て、見覚えのない風景であることに、気がついた。我が家の天井は、決して真っ白くはないのに、ここ天井は真っ白だ。

変わっているのはそれだけではない。いつもは、布団で寝ているのに、ベッドの上に自分が寝ていることに気がついた。

「ここ、病院？」

のんきに質問をしてみた。私の真横にいた兄が、突然ひざから崩れ落ち、大粒の涙を流し始めた。

「杏！ ごめんよ。僕が、杏の言うことを聞かなかったから、杏がこんなことに……」

こんなことと言われても、私は、まだ、自分の置かれている状況がいまいち飲み込めていない。なぜ、兄が崩れ落ちたのだろうか？ 不思議に思っていると、そう言えば、右足が痛いような気がしてきた。

自分の右足を見ようと、頭を少し上げてみる。

私の右足には、包帯がぐるぐると分厚く巻かれており、中にはギプスがあるようで足を思うように動かせない……ということは、私は骨折したと言うことらしい。

骨折……という言葉が浮かんだとたんに、急に私の右足が痛くなってきた。

「痛い！ 痛いよ！」

ベッドの上で、届かないのに右足を抑えるようにして、体を左右に振りまくって私が痛がると父が不思議な顔をして、首をかしげた。「おかしいな。確か、局部麻酔じゃなかったか？ まだ、効いていると思っただが」

局部麻酔が、まだ効いている？ じゃあ、痛いはずがない。それ

に、右足の感覚がないはず。

私が、痛がるのをやめようとする、今度は兄が首をかしげて父に言った。

「父さん、杏は全身麻酔じゃないのか？ だから、痛がってもおかしくないと思うよ」

「そうか？ いや、局部麻酔だろ？」

「違うよ！ 全身麻酔だって！」

二人の議論が白熱してきた。私を含め、女性陣は二人の議論を止めるでもなく、どうすることも出来ずに、ただ、見守るだけだった。二人の議論を見ていたら、右足のこと頭から外れた。痛い、痛くないなんて、考えることすらなくなった。

この際、局部だろうが、全身だろうがどうでも良い。

私は、徐々に冷静さを取り戻し、体を起こすことにした。私が、体を起こそうとすると、母が支えてくれた。それを見て、すぐに兄の奥さんも手伝ってくれた。

体を起こし、ベッドの上から周りをじっくりと見てみた。ここは、少し広めの個室のようだ。大きなテレビがベッドの足元に置いてあり、その奥にはソファがあった。奥には洗面台にトイレ、シャワーまである。

家は、お金持ちじゃないのに、こんな高そうな個室に入院しちゃって、大丈夫なのだろうか。急に不安になり、私はここにもても大丈夫なのだろうかと不安になった。

「お母さん、普通、骨折したくらいでこんなに高そうな個室に入院しないと思うんだけど」

私が、母に話し掛けると、母は驚きの表情を一瞬見せた。何か、焦っているような感じだった。

「いいのよ。他の病室が開いてなかったんだから。杏は、ラッキーなのよ」

「ラッキーって言ったって、ちゃんと個室の料金を払わなくちゃいけないんでしょ？」

「大丈夫よ。他が空いてなくて、仕方なく使っているから、大部屋の料金にしてくれるって言ってたわよ」

母は、そう言ってくれたのだが、あまり明るい表情で言わなかった。母は嘘をつく人ではないのだが、それが本当のことなのか疑問に感じた。個室の料金を払わなくてはならないとしたら治療代が、払えるだろうか？　もしかしたら、払えなくなってしまうかもしれない。

治療代のことを思うと、不安は増大した。それを見かねたのか、兄の奥さんが私に話し掛けてきた。

「杏さん、大丈夫よ。治療代は、加害者が払ってくれるって加害者？」

そう言えば、私はどうやって骨折したのだろうか？　そのときの記憶が全くない。

「加害者って、誰ですか？」

兄の奥さんに聞くと、父と兄の口論は止まり、兄が私の方へと近づいてきた。

「杏、覚えてないのか？」

「全然覚えてないのよ」

他人事のようにつぶやくと、兄は緊張した面持ちで、私に事故のことを話し始めた。

事故があつたのは、スーパーへ行く途中で起きた。兄が横断歩道を周りを見ずに渡つたのを見て、私もすぐに追いかけるように渡つた。

私が、周りを見ずに兄だけを見て、横断歩道を渡つたときに、スピードを出した自転車が私にぶつかってきたそうだった。

兄は、すぐに自分の携帯電話で救急車を呼んでくれた。

ぶつかってきた自転車で乗っていたのは、男子高校生で、塾から家に帰る途中だったと言う。大急ぎで帰ろうと思いい、スピードを出してしまつたそうだった。

彼は、軽症ですんだらしい。私は、救急車が来るまでかなり痛が

り、大声で「痛い」と言っていたそうだ。

ん？ 大声を出していた？ それが本当だとしたら、無意識で叫んでいたのかもしれない。

「私、大きな声を出していたの？」

「そうだよ！ だから、覚えていると思ってたんだ」

ぶつかってから、私は意識があつたようだ。ただ、救急車が来たとたん、に気絶したそうだ。救急車を見て、安心したんじゃないかと兄は言った。

「救急車が来たことも、忘れたのか？」

兄は、半ば啞然とした感じに言った。

「うん、覚えてないなあ。あとで、思い出すかな？」

首をかしげながら必死に思い出そうとしたのだが、どうしても思い出せない。兄が、横断歩道を渡ったところまでの記憶はあるのだが。これって、記憶喪失なのだろうか。しかし、記憶喪失にしては、記憶を喪失している時間が短い気がする。これも、記憶喪失のひとつなのかもしれないが。覚えていない方がいい記憶だから、このまま忘れたままの方が良いのかもしれない。

「あ、先生が来たぞ！」

父が、廊下のほうを見て言った。入り口のドアの一部がガラス張りになっており、先生の顔が乳の場所からはっきりと見えたのだろう。私の主治医が来たようだ。怖い先生じゃありませんように。やさしい先生を期待していると、先生が個室の入り口のドアを開けて、個室に入ってきた。

その先生は、すらっと背が高く、顔が小さくて、二枚目だ。やさしそうな瞳に、口角のきゅっと上がった唇。鼻筋がすっと通っており、髪は少し長めだ。

先生は、とても若そうだ。私と大して年も違わないと思われる。

私は、先生の顔をじっと眺めてしまった。吸い込まれそうなほどに、澄んだ先生の瞳に、私の心が大きく動き、体の芯がじわじわと温かくなってきた。

兄夫婦は、先生が私と話が出来るように、すぐに場所を開け、兄夫婦はソファに腰をおろした。

「主治医の八雲です。どうですか？ 調子は？」

八雲先生が、私の真横に来て笑顔でやさしく話し掛けてくれた。低い声が、私の体に染み渡る。

「ええ、良いですよ」

私は八雲先生と目を合わせると、ニコツと微笑んだ。それにつられてか、先生も微笑んだ。

「それはよかった。明日には、車椅子でトイレに行けるようになりますよ。これから、リハビリをすることになるけれど、一緒にがんばりましょう」

「ありがとうございます」

先生は、希望に満ちあふれたような言葉を、温かい陽だまりにいざなうように私に話し掛けてくれた。

入院なんて今までしたことがなかったし、骨折だつてしたことがない。だから、とても不安で仕方がなかったけれど、こんなに素敵な先生が私の主治医だとわかると、かえって入院してよかったかもしれない。

あんなに医者のことを嫌っていたのに、八雲先生を一目見て、医者に対する印象を百八十度変えてしまうなんて。

両親と兄夫婦が帰り、病室にひとりぼっちになってしまった。

幸い、テレビがあるので、枕元にあるリモコンを手にし、テレビのスイッチを入れてみた。チャンネルを回しても、なかなか見たいチャンネルが見つからない。

肩を落とし、テレビのスイッチを消し、私はベッドに横になった。豪華な個室とはいえ、病室には変わりなく、病院の中であることには違いない。

私の嫌いな病院か……。

兄は、入院には慣れている。何回か手術をしているから、兄は入

院なんてたいしたことないようなことを言っていた。

しかし、初めて入院・骨折した私には、そんな言葉をかけられても不安な気持ちはなくなることはない。

ベッドに横になりながら、今一度、ここがどこであるかを受け止めるかのようにあちこちを見回した。何度見ても、どこを見ても、ここは病院だ。兄の手足を治してくれなかったあの病院に、私が入院するなんて。

医者のイメージは、変わっても病院に対するイメージは、なかなか変わらない。夜がきたら、私はどんな気持ちになるのだろうか。

フラッシュバック

「待つてよ！」

真つ暗な横断歩道を兄が渡ろうとしているのを見て、私は兄を引きとめようと大声を出した。しかし、兄は私の声など耳に入っていないようで、どんどん進んでしまう。

子供のような兄の態度に、仕方なくついて行こうとした。周りを見ずに歩く兄の服をつかもうとした。危ない行為だとわかっているのに、なぜか私はそうしようとは無意識に手を出してしまった。つかもうとしたけれど、一瞬私の手の中に入ったかと思うとずるりと私の手から兄の服が逃げていった。

それに落胆している私の耳に、何かが飛び込んできた。静寂を破る衝撃音。

音に反応して一瞬、立ち止まってしまった私に気がつかない兄は、すでに横断歩道の間地点より先に行ってしまった。兄についていかなくてはと思い、今度は、兄の腕をつかもうと手を出して小走りに兄に駆け寄ろうとした、そのとき、

バーンッ

私の耳を劈く音がこだました瞬間、私の体は宙を舞った。数秒程度ではあるが、確かに空を飛んだ。私の目には、真つ暗な曇り空が写った。音のない世界にいるような、全くの無音状態が続いた後、

ドサッ

不思議な気持ちで夜空を見ていると、全身が硬いアスファルトに強く叩きつけられた。それと同時に、猛烈な痛みが体中から溢れ出した。

背中が焼けるように痛く感じられた。

「キヤーツ！」

あまりの痛さに、腹の底から声を出した。声を出さずにはいられないほど、強い痛みが私を襲った。

パツと目を見開くと、そこにあるのは真っ暗な夜空ではなく、暗闇で灰色になった病院の天井だった。どうやら、事故に遭った時の夢を見ていたようだ。あたりを見回すと、昼間とは違った顔をした無機質な病室だった。

主電源が消されたテレビ、主のいないソファ、ギプスをはめた私の右足。

昼間に見たのと同じ病室なのに、真夜中の病室は表情がまるで違っていた。どこか、寂しげに見える。時計を見ると、真夜中の三時過ぎだった。

早く寝よう。

布団を頭からかぶり、すぐにも眠りにつきたいと思った。

コチコチ

普段は、全く気にしない時計の音が、今日はやけに気になって仕方がない。聞かないようにと耳をふさいでみたけれど、かすかに音が聞こえてくる。

早く眠りたいのに、どんどん目がさえてくる。布団を頭からかぶっているので、体温は上昇し、布団の中の空気が温まり、呼吸がしにくくなってきた。布団をはぐれば良いとはわかってはいるけれど、悲しげな顔をした病室はあまり見たくはない。このまま頭から布団をかぶったままでもいいよう。

しかし、その考えはすぐに変わった。布団の中の空気が温まりすぎて、あまりにも呼吸がし辛くなり、我慢が出来なくなった。仕方なく、布団から顔を出して眠ることにした。

真夜中に一度目がさめたせいか、疲れが取れないまま、私は目がさめてしまった。カーテンを開けた窓からは、さわやかな日差しが入ってくる。それを浴びても、私はなかなかさわやかな気分にはなれずにいた。

昨日の夜見た夢を思い出ししてみると妙に寒気がしてくる。夢の中で起きたことなのに、まるで今、起きたことのような感触があった。忘れているはずなのに、なぜ感触があったのだろう。考えれば考えるほど、気味が悪くなってきた。

気を紛らわせるために、テレビを見ることにした。朝食を持ってきてくれた看護師さんに電源を入れてもらったが、面白い番組がなかったなので、リモコンで電源を消したので、わざわざテレビの近くまで行かなくても、リモコンひとつで電源が入った。

テレビの画面が写ると、すぐにニュース番組が始まった。交通事故故があったようだ。トップニュースで悲惨な交通事故が伝えられた。自分とは全く関係がない事故なのに、そのニュースを聞いただけで声に出せない悲しみが込み上げてきた。

私は、持っていたリモコンを落としそうになりながらも、テレビの電源を切った。

もう一度、眠ろうかと思って、ベッドに横になろうとすると、廊下から独特な足音が聞こえてきた。ベッドに横になるのをやめて、廊下の方をじっと見た。

病室の扉が開くと、兄が出てきた。

「お兄ちゃん！ 来てくれたのね。今日は、一人で来たの？」

私は、安堵した。兄の顔を見たたん、全身から力が抜けてしまっうくらいにほっとした。

兄は、杖をつきながら、私のそばにやってきた。ベッドの脇においてある椅子に腰掛けると、ニコニコしながら、兄は私の顔を覗き込んだ。

もしかして、怖がっていた表情がまだ残っているのかしら？ 子供だなんて思っているのかしら？

「もちろん、一人で来たよ。僕だけじゃ、不満か？」

兄の顔は笑っていたけれど、怒った口調で言った。照れると兄は決まってこう言う態度を取るのだ。

「そんなことないわよ。それより、夜の病院って、どうも苦手だな」「どうかしたのか？」

兄が、心配そうな顔で私の瞳を覗き込んだ。兄の真剣な表情に、圧倒されてしまいそうになった。

あまり兄に心配かけたくないと思いながらも、正直な気持ちを伝えることにした。

「昨日の夜は、夜中に一度目がさめてね。真っ暗な病室を見たら、不気味な感じがして。お兄ちゃんは、子供のころに入院したことを考えると、すごいなって思っちゃった」

「杏は、怖がりだなあ。今度、ぬいぐるみを持ってくるよ。それを枕もとにおけば、怖くなくなるだろう」

私は、小さいころからぬいぐるみが大好きだった。よくぬいぐるみを抱えて家の中をぐるぐる歩き回っていたっけ。

兄が入院するたびに、ぬいぐるみに兄が入院したことを話していた。ぬいぐるみは、いつだって私の不安を拭い去ってくれた。ぬいぐるみは、いつも優しい目で私を支えてくれた。兄は、そのことをちゃんと覚えていてくれたんだ。

私が、ぬいぐるみが来るのを待ち遠しく思っていると、兄が含み笑いを浮かべた。私の中の幼い心を笑っているのだろう。それでもかまわない。早く、ぬいぐるみを持ってきて欲しいな。

「なあ、杏」

きつと私をからかおうとしていると思い、あえて返事はしなかった。

それでも兄は、私の方へと顔を近づけてきた。

「お前、八雲先生のことを好きだろ？」

へッ？

声にならない声が、私の心の中で木霊した。ビクツとして、思わ

ず兄の顔を見てしまった。

「・・・・・・・・」

兄の言葉を否定しようとしたが、それは兄に嘘をつくことになる。私は、八雲先生に対して好意を持っているんだもの。

「お兄ちゃん・・・・・・・・」

ようやく出た言葉。私は、か細い声で、兄をすぎるような目ですう言った。

「そうだろ？ 昨日、杏が八雲先生を見る目を見て、ぴんと来たんだよ。これは、恋する乙女の目だなんて。凶星だろ？」

兄は、全てを見透かしていたようだ。

八雲先生を一目見た瞬間、私の中で何かが動いていた。全身に電気が走ったかのような、強い衝撃を感じていた。それは、とても心地よい衝撃で、このままずっとこの心地よい衝撃を感じ続けたいとさえ思ったほどだった。

これだけのことを感じていれば、周りの人にも伝わってしまったとしても仕方がないのかもしれない。

「杏、八雲先生とうまくいくように、お兄ちゃんは応援してるからな」

兄は、軽く握りこぶしを作って、私にエールを贈ってくれた。

いつもと変わらない、優しい兄のまなざしに、私は全ての不安な気持ちを捨て去った。

「ありがとう」

私は、素直な気持ちでそう言えた。兄は、とても照れくさそうにくねくねと体を動かした。

お昼からは、パン屋に行かなくてはならないので、兄はすぐに帰ってしまった。

兄が帰ると、がらんとした病室にぼつんと一人ぼつちになった。

カーテンを全開にした窓から外を眺めると、太陽の下で医者や看護師さんが歩いていたり、お見舞いの人が急いでいる姿が多々見ら

れた。

白衣を着た医者と言っても、その中に八雲先生の姿は見られなかった。病院の前の通りには、買い物袋を持った女性やスーツを着たサラリーマンらしき男性の姿があった。

私のいる個室は、あまり病室らしくない。テレビだって、ソファだってどこにでもあるようなものだ。しかし、ベッドは、病院のベッドそのもの。可動式のテーブルだって、病院くらいでしか見られないものだ。その可動式テーブルは、私の視野に必ず入ってしまう。窓の外の景色だって、病院の敷地内が必ず見えてしまう。

そよ風が、外の木々を揺らして、病室に心地よい空気をたまに入れてくれる。かすかに、葉っぱの匂いを感じる瞬間だけが、入院していることを忘れさせてくれる。

匂いが消え、なんとなく病室を見回すと、ひんやりとした空気が病室に充満しているのを感じた。

コンコン

私を襲う静寂の恐怖を打ち破るかのごとく、誰かが、病室の扉をノックした。私は、すぐに「どうぞ」と返事をした。すると、すぐに扉が開き、八雲先生が入ってきた。

八雲先生は、片手をポケットに突っ込んで、もう片方の手で器用に扉を閉めた。私は、食い入るようにその手を見つめてしまった。

八雲先生は、ゆっくりと扉を閉めると、温かい笑顔でこちらへとやってきた。

昨日と同様、私の心はスキップを踏むように弾んだ。まるで、満開のお花畑にいるような気分。蝶々が、私の周りをおめでとうと言っているように飛び回っているようだ。目の前に、八雲先生がいる。それだけで、私の心はパーツと明るくなって、自然と顔が緩んでしまった。

「体調は、どうですか？」

八雲先生は、光り輝く太陽のように明るく穏やかな笑顔で、優しく語りかけてくれた。

それなのに、昨日の夜のことが頭をよぎった。八雲先生になら、全てを正直に言えると思い、恐怖心を全て八雲先生に伝えることにした。

「実は……昨日の夜、夢を見たんです」

「夢？ それは、どんな夢だったのかな？ 僕に、教えてもらえるかな？」

八雲先生はそういうと、兄が座っていた椅子に腰をおろした。至近距離に八雲先生が……。鼓動が高鳴る中、私は、夢の話をした。

「交通事故に遭った時の夢だったんです。曇った夜空の下で、私に自転車が突進してきたんです。ただ、ぼんやりとしか覚えてはいないんですが、とても怖くて……」

私を全て見抜いてしまうのではないかと思うほどに、八雲先生は強い視線を私に向けた。痛いくらいにそれを感じ、私の鼓動は速くなり、体が熱くなっていった。

八雲先生は、何を感じたのか、急に立ち上がり、私の背中をあたたい手で優しくさすってくれた。たったそれだけのことに、スーッと私の中の不安が減っていった。

「思い出してしまったんだね。これからも、同じようなことが起こるかもしれない。思い出したら、遠慮しないで話してくれるかな？ 無理に自分の中に溜め込んで欲しくはないんだ。何かの拍子に事故のことを思い出したら、それも含めて全てを話して欲しいんだ」

子供をなだめるような声で、八雲先生は言った。遠慮しなくていいんだ。八雲先生が、私の全てを受け止めてくれるような気がした。

ぴたりと八雲先生の手が止まると、私は急に不安になった。私の背中にあつた八雲先生の手が、離れてしまったのだ。ずっとさすってくれるわけがないのは、わかっていたのに、実際に手が離れると、

心の準備をしたはずなのに、それ以上に心細さを感じた。

「杏さん、ちょっと散歩に行きませんか？」

散歩と言ったって、病院の敷地内をちょっと歩くだけ。八雲先生に出会い、医者嫌いは軽減されたけれど、病院嫌いは治っていない。出来ることなら、散歩に行つて、外から病院の建物を眺めることは止めておきたい気もする。

しかし、相手が八雲先生だ。八雲先生のお誘いを断るなんてもつたいない。

「外の空気を吸いたいたいと思つていたんですよ。でも、良いんですか？ 先生は、忙しいんじゃないですか？」

「医者だつて、息抜きが必要だから」

なんだか、八雲先生は、授業をサボろうとしている学生のような表情をしているように思えた。してはいけないとわかつているけれど、それをしていたいと思つて、強行に実行しようとしている感じがした。

本当は、八雲先生は忙しいのだろう。私は、悪いことをしてしまったのだな。八雲先生に、必要以上に心配をかけてしまつて。

気がひけるものの、私は散歩に行くことを止めなかった。

八雲先生が、急いで車椅子を持ってきて、私を車椅子に乗せてくれた。また、八雲先生との距離が近くなつた気がした。

病院の建物から出ると、病院の敷地内をゆつくりと歩いた。私の後ろには、八雲先生がいる。残念なことに、八雲先生が車椅子を押しているのです、私からは八雲先生が見えない。声は聞こえるけれど、顔も見たいな。

長身に二枚目の顔。そして、笑顔。八雲先生の笑顔に包まれていくときは、私にとって至福の時だ。これほどまでに、心がトキメキ、安らいだことなんて、今までに感じたことはなかった。私が、こんな気持ちになれるときが来るなんて。想像すらしていなかった。

病院の敷地内の道をそよ風の速度で、八雲先生は歩いた。後ろから、今日は心地よい天気だということを話してくれた。私も散歩日

和だと言い、いつもとは違った目線で周りの景色を見回した。

なるべく、病院の外を見ようと心がけた。歩道側には、木々がたくさん植えられている。名前はわからないけれど、青々と茂った葉が、私を健康にさせているような気がした。

病院の門に差し掛かると、八雲先生は門の方へと方向転換した。そして、門の外へ出た。

さっき、先生が病室で見せた表情の意味が、ようやくわかった。誰にも内緒で、授業をサボった学生のような気持ちに、私もなってきた。

私が、嫌な夢を見たから、気晴らしにでもと思って外に出たのだろう。こんな気遣いをしてくれるだなんて。

歩道を歩く人と大して変わらないスピードで、病院の隣にある公園に行った。古びた木のベンチの横に車椅子を止め、八雲先生はそのベンチに座った。初めて、八雲先生と同じ目線になれた。

「良いんですか？ 外に出ちゃって」

「このことは、他の人には内緒だよ。二人だけの秘密だよ」

八雲先生のはにかんだ笑顔が、また魅力的に思えた。

この公園には、子供の姿はなく、サラリーマン風の人が数人ベンチに座っていた。肩を下げ、浮かない表情をしている。営業周りなのか、その姿を見るだけで、体の疲労度が手にとるようにわかった。「杏さんは、入院ははじめてだって言うから、病院の中にずっといるのは精神的にあまりよくないんじゃないかと思ってるね。どうか？ 病院の外に出てみたけれど」

木々の隙間から差し込む日の光が、八雲先生の顔を照らした。くつきりと見える八雲先生の顔に、私は背中がくすぐりたくなった。「公園に来て、よかったって思います。正直、ずっと病室にいるより、こうして外の空気を吸う方が、すごく気持ちが良いなって」

「よかった。でも、くれぐれもこのことは、他の人には言わないように」

「もちろん、誰にも言いませんよ」

二人で、声をあげて笑った。

まるでデートみたい。私は、心の中で、勝手にこれをデートにしていた。八雲先生にとっては迷惑な話かもしれないけれど、八雲先生との甘酸っぱい思い出にしよう。

十数分くらいで、病院に戻った。あまり長く外にいと、他の人にばれてしまうから。本当は、もっと外にいたかったけれど、仕方がない。八雲先生に迷惑をかけたくもないし。

八雲先生とはじめてのデートは、たったの十数分で終わってしまったけれど、二人だけの秘密を作ったことが、初恋の思い出のようなくすぐりたい思い出となった。

たったそれだけのことなのに、少し自分の心が若返ったようだ。

まるで、純情な高校生のような恋心を持って、私は入院生活を送っている。病室は、相変わらず高級感のある個室のまま。大部屋が空いたらそちらに移動するはずだが、まだ、入院して大して日がたっていないのだから、仕方がないか。

何も無い、何も流れない。

誰も来なければ、この病室に変化は出てこない。私だけの空間。窓から外を眺めてみても、それは変わらない。少しだけ開けてある窓から、風が競って中に入るたびに、白いカーテンが音を立てたなびくのをじっと見つめた。ポワンスポワンと音を立てるカーテンが、生きているように見えた。新しい生物を発見した気分で、私は飽きずにそれを見ていた。

コンコン

扉をノックする音だ。ようやくこの病室に変化が出てくる。扉がゆっくりと開くと、兄と八雲先生が寄り添うように立っていた。

意外な組み合わせだった。一体、どうして兄と八雲先生と一緒に

いるのだろうか？

「よう！ 杏！ 約束したぬいぐるみを持ってきたぞ。お前のおかげで持っていたウサギのぬいぐるみだ。今朝、パン屋に行く前に実家によって持ってきたんだぞ」

兄は、威張って私に言った。手にぶら下げていた白いスーパーの袋を私に乱暴に手渡した。中には、確かに私がかわいがついているウサギのぬいぐるみが入っていた。かわいがりすぎて、少し汚れてしまっている。

「ありがとう」

私のことを思ってくれた兄の気持ちに感謝した。

「お兄さんが、迷子になったと言って。それで、僕が連れてきたんですよ」

八雲先生は、いつもの笑顔を振り撒きながら言った。

「先生、どうもすみませんでした」

兄は、八雲先生に軽く頭を下げて言った。すると、すぐにこちらを向き、私の耳元でささやいた。

「杏、お兄ちゃんが先生を連れてきたからな。このチャンスを無駄にするなよ」

兄は、私になれないウインクをした。兄は、わざと病院内で迷子になったようだ。迷子になったというよりは、八雲先生を探していたのだらう。そして、迷子になったと言って、病室に八雲先生を連れてきてくれたに違いない。

兄らしいやり方だ。不器用ではあるけれど、私のためを思ってくれたのだ。いろいろな意味で、ありがとう。

「じゃ、僕はもう帰るよ。早く帰らないと、夕飯残してもらえなくなるから。じゃ、杏、お大事に」

「え、もう帰っちゃおうの？」

まだ、来て数分しかたっていないのに、兄はそそくさと帰ってしまった。病室には、私と八雲先生と二人きり。何度も八雲先生と二人きりにはなっているけれど、毎回緊張してしまう。どうしても、

私の心は慣れてはくれないようだ。

「先生、兄がご迷惑をおかけしてしまつて……」

「いや、良いんだよ。それより、あれから事故のことは思い出した？」

私が軽く頭を下げると、八雲先生は手でそれを静止し、すぐにベツドの脇にある椅子に腰掛けた。

「いえ、あれ以来、事故のことは思い出していません」

八雲先生の心配を和らげるように、はっきりとした口調で言った。私の言葉に、八雲先生は少し安心したのか、安堵の表情を見せた。

窓から稲光が見えた。空は、少しグレーがかつており、稲光がはつきりと見えた。稲光とともに、ガシャンととてつもなく大きな音が、病室中にこだました。

その瞬間、私の脳裏にあの思い出したくない記憶がよみがえつた。「うわっ！」

あの時、私の間近で聞こえたその声。それに気づいて、そちらを見た瞬間、私は自転車と衝突したのだ。私の右側から突っ込んできた自転車。自転車の姿は、それしか覚えていない。

乗っていたのは、男子高校生らしく、制服を着ていた。かごにはかばんが無造作に入れられていた。その男子高校生の顔は、死にそうなくらいに青ざめていた。目を最大限に見開き、肩に力を入れたままで、突っ込んできたのだ。

たった一瞬のはずなのに、なぜか詳細に思い出してしまった。

ぶるぶると私の体は、自然と震え出した。急いで、それを止めようと両腕をつかみ、押さえつけたが、全く意味をなさなかった。私は、両腕をつかむのを止め、髪がぐしゃぐしゃになるのも気にとめずに、頭を抱え込んだ。

「杏さん！ どうした？」

八雲先生は、驚いて椅子から立ち上がり、私の肩に手を置いた。

「怖いんです。事故のことを、思い出してしまつて……」

私は、俯き目をぎゅっと強く瞑った。頭を抱え込むのを止めると、

八雲先生は、私を強く抱きしめた。赤子を包むような格好で、強く私の震えを止めようとするかのように八雲先生は強く私を抱きしめた。

それでも、体の震えは止まらない。

八雲先生の胸に、顔をうずめ、自然と震えが止まるのを待つしかないようだ。また、稲光が光れば、事故のことを思い出してしまふに違いない。私は、窓の外を見ないように努めた。

強く抱きしめていた八雲先生の腕の力が抜け、その体が離れると、自然と体の震えが止まった。

私は、驚いて八雲先生の瞳を口をぽかんと開けて見つめた。八雲先生も私に返すように私の瞳をじっと見つめてくれた。

と、次の瞬間、私たちはキスをした。

豹変

稲光を見たショックで、交通事故のことをすべて思い出してしまった。それはとても恐ろしく、忘れてしまっていた方が、ずっと楽だった。

とは言うものの、八雲先生のやさしさが私を支えてくれているお蔭で、夜も眠れないようなことはなかった。八雲先生は、毎日、病室に訪れては私の話を聞いてくれた。休みの日でも、私に会うために、わざわざ病院まで足を運んでくれたのだ。

そして、リハビリも順調に進んだ。骨折くらいと最初は、たかまくくつていたけれど、骨折のリハビリは想像以上に大変だった。リハビリも大変だけど、ギプスをはめている場所の痒さは、本当につらい。ギプスはずしてかきたいけれど、まだ、ギプスはずすわけにはいかない。我慢はしているものの、やはり痒くて仕方がない。他にやるのがないと、右足のかゆみにはかり神経が注がれてしまう。全く意味をなさないとはわかってはいるものの、ギプスの上から手がかいたりした。もちろん、かゆみは全く収まらない。

松葉杖を使い、なるべく個室を出るようにした。病室にずっといることが嫌なわけではないけれど、病院内の散策がだんだんと楽しみの一つになってきたのだった。

別に毎日変化があるというわけではないけれど、いろいろな科があるんだなと思いつながら、あちこち見て歩くだけで、結構楽しめた。小さいころに、兄が入院していた科を見ては、幼い頃を思い出した。その科はほとんど変わっていなかったのだ。兄が入院していたところと全くと言っていいほど変わっていないのだ。幼い頃の自分の気持ちが生々しく、とても複雑な気持ちになったりもした。

毎日のように、今日は、内科に行こう！ だとか、今日は、産婦人科だ！ とか気合を入れては院内の散策に出かけた。中でも、新生児室に行くのが一番好きだ。小さなかわいらしい赤ちゃんが、た

くさん並んでいる。私とは、全く血が繋がっていないけれど、みんなかわいくて仕方がない。

今日も病院散策をして、自分の個室へ戻る途中に、大部屋を覗いてみた。大部屋が空いたら、そちらに移動させて欲しいと言っていたけれど、なかなか移動できないので、どれくらい大部屋が空いていないのかを見てみたかったからだ。

私は、ゆっくりと松葉杖を使って歩きながら、大部屋を覗いてみた。何部屋かを覗いてみたけれど、どの大部屋もベッドの空きがあるようだ。それに、寂しそうな顔をした女性が、二人部屋を一人で使っていたりもした。あんなに高い個室に私がずっといる理由などないはずじゃないか。それなのに、なぜ私を大部屋に移動させてくれないのだろうか？

不思議に思いながら、私は個室に戻った。がらんとした個室。お金持ちでもないのに、こんなに豪華な個室にずっといるなんて。加害者が費用を払うとは言え、やはり大部屋に移動したい。ここしか空いていないからと言って、この個室を利用することになったけれど、あれだけ他の部屋が空いているんだ。特別料金が発生してしまわずだ。

それに、早くここを退院したい。これだけ松葉杖を使って移動できるのだから、もう退院したっていいと思うのだが。

ベッドに横になり、ふとベッドの脇の台に目をやった。ベッドの脇に置いてある、お見舞いの花。パン屋のみんなが、私を励まそうとみんなでお金を出し合ってくれたものだ。みんなの下へ、早く帰りたいな。この花が元気なうちに、退院したい。

何時の間にか眠ってしまったらしい。時計を見ると、もう夕食の時間だ。おあつらえむきなことに、看護師がワゴンを押して廊下を歩いている姿がドアのガラス窓に映った。看護師は、私の部屋の食事を持って個室に入ってきた。普段どおりに笑顔を見せながら食事を運んでくれた看護師に、思い切って大部屋への移動を切り出

すことにした。

「あの、前にもお願いしたと思うんですが、大部屋に移動はさせてもらえませんか？」

可動式のテーブルに食事を乗せると、看護師は露骨に目を泳がせた。宙をさまよう応えを探しているのだろうか。目を泳がせるのをやめると、看護師は私の目を見た。

「申し訳ありません。大部屋は空いてないんですよ」

看護師は、私に心からわびるように言った。

しかし、それは嘘だということが、私はすぐにわかった。大体、大部屋に空きがないことが嘘だ。なぜ、そんな嘘をつくのだろうか？ 不思議に思いながらも反論せずにはいられなかった。

「私、今日の昼間に大部屋を覗いてみたんです。そしたら、空いているベッドがいくつもありましたよ。ちゃんと空いてるじゃないですか！ なぜ、空いていないなんて言うんですか？」

私が、少し強い口調で言うと、看護師は明らかに動揺してしまっただ。その場に立ち尽くし、何か言葉を捜しているのが、手にとるようにはわかった。目が泳ぎ、何も持っていない手は何かを探そうとしているかのように、握るでもなく開くでもなく、どこか安定する場所を求めているようだった。

「あの……」

私が、言葉をかけようとする、看護師はそそくさと病室を出て行くこうとした。

ガシツとその場を去ろうとする看護師の手を、私はすばやくつかんだ。

「待って下さい！ どういうことなんですか？ 大部屋にどうして移動できないんですか？」

「ここに入院させるようにと、頼まれているんです」

看護師は、全く私と目を合わせず、かすかに空気を動かす程度の小声で話した。

「頼まれているって、誰にですか？」

「……院長婦人です」

院長婦人？ 一度も会っていない院長婦人が、どうして私を？ その言葉を聞いた瞬間、私は看護士の手を離した。看護士は、大急ぎで乱暴に扉を開けて出て行った。

それより何より、院長婦人が私を個室に入院させるように命令するって、どういうことなのだろう？ 私が、院長婦人に知らぬ間に何か悪いことでもしてしまったのだろうか？

個室でないといけない理由って、一体どんな理由なのだろうか？

夕食が済み、可動式のテーブルの上に、食器を置いたまま、私はさっきの看護士の言葉を繰り返した。

「院長婦人……院長夫人……」

どうしても、理由が見つからない。

兄が持つてきてくれたぬいぐるみを抱え、その理由を見つけようと考えた。ぬいぐるみの頭を撫で、入院生活を振り返った。しかし、何一つ理由が見つからない。あるとすれば、八雲先生のことくらいしか浮かばない。

八雲先生は、この病院の跡取息子。父親は、もちろんこの病院の院長だ。八雲先生は、一人っ子で、後を継ぐのは確実。

八雲先生は、私のことを院長婦人に話したのだろうか？ それともうわさでも耳に入っただのか？

どちらにしても、不気味なことには変わらない。一度も会っていないのに、私を個室に閉じ込めるのだから。

一人で、あれこれ考えていると、誰かがやってきた。ドアが開く音がして、そちらを見ると八雲先生がほんのりとりんごのように頬を赤らめて入ってきた。

八雲先生は、軽く笑みを浮かべていた。可動式テーブルの上においてある食器を見て、八雲先生は「お！」と言い、驚きとうれしさを出していた。

「残さずちゃんと食べてるね。ここまでは、順調だし、退院する日

もそう遠くはないと思うよ」

八雲先生がベッドの脇の椅子に座りると、私は昼間のことを問いただした。

「先生、どうして大部屋に移動させてもらえないんですか？ 前から何度も言っていたのに。今日、看護師さんに聞いたら、院長婦人に私をこの個室に入院させるように言われたって聞いたんですけど……」

優しい目から一転して、八雲先生は難しい顔をした。顔をゆがめ、腕を組み、視線を私からはずして、考え込んだ。

「先生？」

突然、黙り込んだ八雲先生。何か、言えない理由でもあるのだろうか？

私は、八雲先生の顔を覗き込んだ。今までこんなに真剣な顔をした八雲先生を見たことがないのだ。

「それが……、僕にもわからないんだ。いつまでたっても大部屋に移動しないから、看護師に聞いたんだが、同じことを言われてね。それで、母さんに直接聞いてみたんだが、何も言わなかったんだよ」

どうやら、八雲先生も私と同じ立場にいるようだ。何が起こっているのかを知らないんだ。眉間にしわを寄せて、必死に理由を探している八雲先生を見ると、私の不安は倍増していった。どんな力が働いて、私をここに留まらせているのだろうか。

「先生は、私とのことをお母様に言っただんですか？」

「いや、言っていないんだ。だから、余計に、なぜこんなことをするのかわからない」

やはり、私とのことは言っていなかったんだ。少しほっとはしたものの、より一層私を個室に入院させる理由がわからなくなってしまった。私を個室に入れさせて、一体、何かあると言うのだろうか。「実は、杏さんを最初は大部屋に入院させようと、僕は思っていたんだ。しかし、突然、母さんが口を出してきて、杏さんを個室に入

院させるように言ってきたんだよ。さすがに、僕はその理由を聞いたんだけど、答えてもらえなくなってるね」

自分の息子で、私の主治医である八雲先生にも言えない事があるのか。私たちはまだ、出逢って大して日がたっていない。考えれば考えるほど、答えは遠のいていくようだ。

「それを聞いたとき、僕は、母さんに自分の心を見透かされているんじゃないかって思ったんだよ」

「心を見透かされてるって、何をですか？」

私が質問をすると、八雲先生は顔を赤くして照れ笑いを浮かべた。どうしようかと迷っている様子だったけれど、顔を赤くしたまま答えを教えてくれた。

「杏さんが、病院に運ばれてきたとき、僕の体に電気が走ったんだ。杏さんを一目見て、僕の心は杏さんに奪われたんだよ」

話す前よりも顔を赤くして、背中をもぞもぞさせながら八雲先生は言った。

聞いている私まで、背中が痒くなった気がした。でも、とても嬉しかった。お互いに一目ぼれだったんだなって。

私が、交通事故に遭ったのは、八雲先生と出会ったためだったのだろう。私たちは、お互いに運命の赤い糸を手繰り寄せ、そして、この病院でようやく出会うことが出来たんだ。その代償は痛いけれど、八雲先生が医者だったからこんな出会い方になってしまったのだろう。

迷惑をかけた両親、そして、一番心配をしている兄には、本当に申し訳ないと心の中で謝った。それだけじゃない。加害者の高校生だってそうだ。

こう考えてみると、私は、ずいぶんたくさんの人に迷惑をかけてしまっている。私一人で、こんなにもたくさんの人に影響が出ているのだから。

「だから、母さんは僕が杏さんを見る目を見て、一目で僕の心を見透かしてしまっただんじじゃないかと思ってね。はっきりとした理由は

わからないけれど、それで杏さんを個室に入院させたんじゃないかと思うんだ」

話を最後まで聞いたけれど、私にはそれが理由のように思えなかった。いくら親とは言え、すぐにそこまでわかるだろうか？ それに、そこまで口をはさむだろうか。

夕方になると、窓から真っ赤な夕日が差ししてくる。まぶしいわけでもなく、とても風情のある赤だ。夕日を見るたびに、もうすぐ夕食の時間だなと考えてしまう。食いしん坊なのだろうか。

今日は、夕食の前に両親がお見舞いに来てくれた。私が、いつものように洗濯物を母に渡すと、両親は、なぜか深刻な顔をしてお互いを見合った。

普段見せない顔を見せられて、私は怖くなってしまった。

「どうしたの？ 変な顔して」

私が心配して言うと、父が私のそばに来て、何かを決心したのか、まっすぐに私の瞳を射抜いた。

「杏！ 転院しよう。他の病院に行こう」

冗談のような言葉ではあるけれど、父は真剣なまなざしで、強く私を見ていたので、すぐに本気だと言ったことがわかった。

「どうしたのよ、急に転院しようだなんて。別に、転院しなくたって良いじゃない。ここの病院に、何か不満でもあるの？」

私の中には、全く転院をしたいという気持ちはなかった。謎に思うことはあっても、この病院に不満があるわけではない。

一瞬、黙ってしまったかと思うと、父はまた、私を説得し始めた。「杏、理由はともかく、早くここを出よう。転院が駄目なら、退院でも良いんだ」

転院の次は、退院と言ってきた。母は、父の隣で、うんうんと頷いていた。

「どうして、そんなことを言うの？ もしかして、八雲先生を気にしているんじゃない……」

もしかしたら、私と八雲先生の関係を知ってしまったのではないだろうか。主治医が患者に気安く手を出したことを知って、私をここから出そうとしているのだろう。

「理由は何だつて良いじゃない。それより、早くここを出しましょう」
父が答えに迷っていると、見かねた母が父の前に出てきた。

母も父も尋常ではない。必死に私を説得しようとしている。それでも、私の心が揺らぐことはない。八雲先生から、退院の許可が出るまでは、入院し続けようと思っている。できる事なら、大部屋へ移動して欲しいけれど。

また、院長婦人の意向がわからないと言う不気味さもあるが、素人判断でここを出て大丈夫かという不安の方が強い。

私が、全くここを出ようと思わないので、二人とも困り果てているようだ。

父は、頭を抱えて窓際に立ち、カーテンをぎゅっと両手でつかんだ。硬く瞑った目、涙を浮かべそうな顔には、絶望感が漂っていた。夕日に染まって、その顔は真っ赤に燃え上がっていた。

「お父さん、大丈夫よ。ここの病院はいい人ばかりなんだから。心配する必要なんてないわよ」

「そんな簡単なことじゃないんだ！」

父は、こちらを向いたと思うと、病室の外にもはつきりと聞こえるくらいに大きな声で叫んだ。

私は、父を励まそうとして言ったけれど、かえって父を激怒させてしまった。今までに見たことがない父だった。顔を真っ赤にして、ベッドにごぶしを振り下ろした。その父の姿を見て、私はただならぬ何かを感じた。何か、大きなことが後ろにはあるのだろうか。

誰も彼もが変わっていて、誰を信用したらいいのかわからない。

怖い。だけど、八雲先生と一緒にいたい。兄の体を治してくれなかった病院のイメージをすっかり変えてくれた八雲先生から離れたくはないと言う気持ちだが、私をこの病院から出そうと思わない。

「お父さん……」

母が、父をなだめた。父は、落ち着きを取り戻し、いつものやさしい父の顔に戻った。

「杏、今日はもう帰るよ。悪かったな」

弱弱しい声で、父は私に謝った。父の肩は、だらりと垂れ下がり、そこに先ほどまでの威勢のよさは微塵も感じられなかった。その顔は、まるで何もかもを失ったように見えた。

「今日は、もう帰るわね。杏、さっきの話し、まじめに考えておいてね」

母はそう言つて、父の腕を取り、ゆっくりと重たい足取りで病室を去つていった。パタンと扉が閉まると、底知れない恐怖を感じた。あまりにも突然のことで、私はまだ、動揺している。あんなに優しく、温かい両親が、いきなりどうしたと言ふのだろうか？

八雲先生の母親だつてそうだ。みんなおかしい。みんな変だ。何かを隠しているのだろうか？

例え、私と八雲先生の間係を知ったからと言って、ここまでヒステリックな行動を起こすとは考えられない。目に見えない恐怖が私を襲つた。

答えは、どこに行けば見つかるのだろうか。

真実

私は、相変わらず個室に入院したままだ。松葉杖使いもうまくなり、大部屋にいけないうのも不思議だけれど、退院できないのも不思議だ。

両親が、私に転院と退院を提案したけれど、私はどちらも受け入れず、八雲先生もそれを受け入れることはなかった。

「先生、もう退院してもいいんじゃないかと思うんですけど」

八雲先生の顔を見るたびに、私は繰り返し聞いた。

「……もう少し、様子を見てみよう」

八雲先生は、必ず答えを言う前に間を開ける。他の質問には、間髪を入れずに答えてくれるのに。本当に、このまま入院し続けるべきなのかと、私は毎回思った。

両親が、洗濯物を取りに来るときに、八雲先生から退院の許可が下りないことを告げると、父も母も、肩を大きく落とし、私にも見えずぐにわかるくらいに落胆した。

もちろん、両親は涙こそ流さなかったけれど、深く深く悲しがつているのがわかった。

私は、理由を何度か聞いてみた。どうして、そんなに転院、退院したがるのか？ と。

何度聞いても、言葉を濁すばかりで、両親は答えてはくれなかった。兄にも念のために聞いてみた。兄も心当たりが全くないと言っていた。

八雲先生も自分の母親に、私が個室にいる理由を何度か聞いてくれた。しかし、理にかなった答えは一度もくれなかったそうだ。

みんな、何かを隠している。

いつしか、私の心にその言葉は浮かび、今では確信に代わった。

雨の振りそうな空をベッドから眺めていると、少しだけ空いた窓の隙間から入る生ぬるい風に、カーテンが揺らめいた。旗を掲げて

いるかのようにゆらゆらとカーテンは揺らめいた。大きく揺れたカーテンが私の頬を撫でた。

そして、また、窓の外に目を移した。

真っ黒い雲が、遠い空にあるのがわかった。病院の上も灰色の雲で覆われていた。しかし、あの真っ黒い雲ではないので、まだ、雨が降っていないのだろう。今日は、きっと雨が降る。

今日は珍しく午前中に兄が見舞いにきてくれた。ちょっと私の顔を見ただけで、兄はすぐに帰ってしまったけれど。

午前中に兄が来たのは、正解だった。それは、この空を感じていたからかもしれない。

兄は、昔から天気とは縁が深かった。

どこに出かけるときも、兄が外にいるときは大抵晴れているか曇っていた。雨に降られることは、ほとんど記憶にない。兄が、建物の中に入ると、急に雨が降り出すことが少なくなかった。

兄が、出かけたときに少し休みたいと言い、喫茶店などに入り、席に座って落ち着いたところになると、外が暗くなりだすことが多い。それから数分後には、雨が降るのが当たり前のようによかった。

兄と雨の関係には、いつも驚いていた。

今日だってそうだ。帰り際に寄っていたら、きっと雨に降られていただろう。兄は、晴れ男なのだ。それは、兄の性格から来ているのかもしれない。朗らかなしゃべり方をし、ジョーク交じりに滑稽なことばかりを話す。兄の周りには、笑いが耐えない。笑いに雨は似合わない。

兄がいない今、雨が降ることは当然のことのように思えてきた。

もうすぐ雨が降りそうだと思います、私は窓をしっかりと閉めた。窓際に立ち、遠い空のあの真っ黒い雲を見つめた。また、雷を落とすのだろうか？ 今度は、あのときほど怖がったりはしないだろう。たとえ怖がったってかまわない。そばに、八雲先生がいてくれるのなら。

「ねえ、先生。私は、いつ退院できるの？」

八雲先生が回診に来たときに尋ねた。ここ数日、八雲先生の顔を見るたびに、同じ質問ばかりをして、八雲先生を困らせ続けている。別に、八雲先生を困らせたいわけではないが、個室に閉じ込められ続けていると、気味が悪くて仕方がないのだ。

「先生？」

「それが……、退院できないんだ」

青白い顔で、八雲先生は言った。

退院できないとは、どういうことだろう？ 何か、私の体によからぬ事態でも起こってしまったているのだろうか？

「先生……、私、大丈夫なの？ もしかして、私の体に何かあったんじゃない……」

「違うんだ」

不安がる私をガシツと強く押さえつけた。必死の形相で、私を支えるように強くその瞳で私を抱きしめる。

「どういうこと？」

「実は……、言いくいんだが、僕の母が、退院させないで欲しいと言ってきているんだ」

また、院長婦人が？ 八雲先生の母親が？

「どうして、どうして先生のお母様が？」

「もちろん、理由を聞こうとしたさ。でも、どうしても教えてもらえないんだよ」

ぞくつとした。背筋が凍るような思いがした。

一度も会っていない院長婦人が、どうして？ 理由を教えてもくれないなんて、気味が悪くて仕方がない。

私の両親も、転院や、退院を強く希望していたことを思い出した。みんなどうかしてる。何かを隠していると思うけれど、何も思いつかない。

「おかしいわね。私の両親も私を転院させたがっていたし」

「ああ、杏さんのご両親には、何度も転院か退院させるように言われたよ。お二人とも、何か焦ったような感じだった。僕に、必死に訴えかけて来るんだ。しかし、僕の母さんから杏さんを絶対に退院も転院もさせないようにと言われているから、毎回断っているんだよ。もちろん、母さんの話はしていかないよ。僕が断るたびに、ご両親が今にも泣き崩れそうになってね。僕も、どうしたら良いかと思っ

っているところなんだよ」
八雲先生は平生を取り戻すように、ベッドの脇においてある椅子にどすんと座った。その顔は、青白く倒れてしまいそうだった。

「先生、大丈夫？　なんだか、顔色が悪いけど」

「ああ、僕なら大丈夫だよ」

私の問いかけに、八雲先生はいつもの笑顔で答えてくれた。

ずっと個室に入れられっぱなしで、私は誰からも忘れられたのではないかと思うようになってきた。これでは、まるで鳥かごの中に閉じ込められた鳥のよう。ギプスだって、もうじきはせると八雲先生は言っていた。松葉杖を使う生活ももうじき終わる。

いくらなんでも、おかしい。両親だって、何度も八雲先生に転院、もしくは、退院させて欲しいと言っていたのだ。

両親のことを考えていると、両親が見舞いにやってきた。今日は、兄夫婦も一緒だ。一度に四人も来てくれたので、病室がとてもにぎやかになった。四人が、私のベッドの周りを囲んだ。両親は窓側、兄夫婦は廊下側。兄は、椅子に腰を降ろした。

「杏さん、体調はどう？」

「お姉さん、とっってもいいですよ」

兄の奥さんは、私の長期入院を一番疑問に思っている。だけど、そのことを私の前では、一切口には出さない。今の私への問いかけも、疑問を投げかけているように感じた。私は、それを全て打ち消すかのように、普通に答えたのだが。

以前、兄から、兄の奥さんが不思議に思っていることを何度か聞

いた事があつた。兄は一人で見舞いにやってきては、兄の奥さんが私の体をかなり心配してくれていると話してくれた。

私自身は、骨折を抜かせばいたって健康そのものだというのに、奇妙な入院生活をいまだにさせられている。

兄は、ソファで休むことにした。兄の奥さんが一緒についていた。

両親は、ベッドサイドを陣取っていた。兄の奥さんが、兄の横に座ると、両親は私をじつとにらみつけた。母は、持っていたハンドバッグから折りたたんである布製の袋を取り出して、広げた。

「杏、早くこの病院を出しましょう」

母が、必死の形相で私に言ってきた。

「そうだよ。病院が退院を許可しないのなら、自分たちで出て行けばいい」

父も鬼気迫る声で私に言った。

そして、母が荷物をまとめようとした。私の横で、母が先ほど広げた布製の袋の口を開け、荷物を中に入れようとしたので、私はそれを静止するように母をなだめた。

「お母さん！ 何してるのよ。まだ、退院の許可は出ていないのよ。そんなこと、許されないわ！」

それでも母の手は止まらないので、私は、母の腕をつかみ、そんなことは止めてと言わんばかりに力いっぱい、母の手を押さえつけた。

「杏、離しなさい！」

父が、私を静止しようと私の腕を掴んだ。それを見ていた兄夫婦が、驚きの表情で急いで立ち上がり、兄の奥さんが兄を支えながら、こちらへやってきた。

「どうしたんですか？ まだ、退院の許可は出ていないんですよ」

兄の奥さんが、母の肩をつかんで、そう言った。

「そうだよ、どうしたんだよ。父さんも、母さんも。今日は、変だぞ」

兄夫婦が、両親を説得し始めた。それでも、母はその手を全く止めようとしない。

「お母さん！ もう止めてよ！ どうして、そんなに私を病院から遠ざけたがるの？」

目に見えない恐怖を抱きながら、半ば怒りを交えつつ、私は母に強くその言葉を投げつけた。すると、母の手はぴたりと止まった。かすかに、母が冷や汗をかいているように見える。母は、手どころか微動だに動こうとはしない。

「してはいけない質問だったのか？ 私は、何がいけなかったのかを考えた。そして、申し訳ない気持ちになった。」

「どうしたんだよ、母さん」

兄も心配になったのか、母に言葉をかけた。気がつくくと、父まで息苦しそうな表情をしていた。窓際で、紺のポロシャツの襟に手を当て、父は目で何かを探しているようだった。見つからない答えを必死に探しているように見えた。

凍りついた空気だけが流れる中で、私は枕もとにおいてあるぬいぐるみの頭を撫でた。それを見た兄が、どこか昔を振り返るかのような穏やかな表情を見せた。

「杏は、そのぬいぐるみが本当に好きなんだな」

「うん」

沈黙から抜け出した個室。母は、はっとしたのかまた、その手を動かし始めた。

「お母さん……」

私の真横で、母が荷物の整理を再開してしまった。手際よく、てきぱきと動く母の手に、もう止めることは出来ないのではないかと思ってしまった。それでも、私はその手を止めようと、母の手首をつかみ、振り払われようが何をされようが、この手を絶対に離さないとはかりに力をこめた。

「止めてったら！ どうかしてるわよ！」

想像以上に、私は大きな声を出していた。

「杏、止めるんじゃない！」

父が、母の手をつかんでいる私の手を振り解こうとした。兄の奥さんが、父の後ろに回り、父を説得しようと父の腕をつかんでいた。「お父さん、よしてください。杏さんだって、こう言っていますし」兄の奥さんは、父の顔色をうかがいながら、やさしい口調でなだめようとしていた。しかし、父は全く顔色ひとつ変えずに、私の腕を取り、母からその手を離そうとした。

その光景を迷いながら、ただ呆然と兄は見ているだけだった。あたふたしてベッドの足元で、ただ、立っていることしか出来ないことに、いらだつているように見えた。

「みんな、おかしいわよ！ どうしたって言うの？ みんな、何かを隠してるんじゃないの？」

一所懸命に、私は声を張り上げた。それでも、誰一人としてその手を止めようとはしなかった。

突然、沈黙が走った。勢いよく誰かが個室のドアを開けた。その場にいる全員がドアの方を見ると、八雲先生と看護師が一人入ってきた。八雲先生が、血相を変えて父を通り越し、母の腕を取って、その手を静止した。

「一体、何をしているんですか！ 杏さんが、不安がっているではないですか」

「離してください！ 今すぐ、杏を連れて帰ります！」

「連れて帰るって……。お母さん！ 退院の許可は、まだ、出していないんですよ！」

目を真っ赤にして、母は八雲先生を強く威圧して言った。八雲先生は、それに慣れているのか冷静な表情を崩さなかった。

八雲先生と一緒に入ってきた看護師は、兄をソファに落ち着かせ、父をなだめていた。父は、簡単に落ち着くことはなく、看護師の静止を聞こうとはしなかった。それどころか、父は看護師を怒鳴りつけていた。

混乱する病室に、もう一人、静かに入ってきた。金色の派手なイ

ヤリングを重たそうにつけ、指には大きな石がついた指輪をいくつもはめ、赤く派手なワンピースを身にまとった婦人だ。彼女は、腕を組み、猛然と歩いてやってくると、両親は真っ青になった。八雲先生もそちらを見ると、口を大きく開けて驚いていた。

「母さん！」

八雲先生が、驚き混じりに大きな声で言った。彼女は、八雲先生のお母さんで、院長夫人なのだ。私をこの個室に入れた張本人。

院長婦人は、父をなだめていた看護士を外に出し、病室の扉をぴたりと閉めた。

「野高さん、こんなことをされては困りますよ。杏さんは、まだ、入院していてもらわなくてはならないのですから」

「し、しかし……」

父が、院長婦人の言葉を打ち消そうと落ち着きのない声を出した。「野高さん、わかっておられるんでしょう？　なぜ、杏さんがここにいるのか。どうやら、約束どおり、誰にもあのことは話していらつしやらないようね」

上からものを言うように、胸を張り堂々と院長婦人は話し続ける。両親は、困惑している。

「あのこと？　母さん、何のことだ？」

八雲先生が、訝しい顔で院長婦人に尋ねた。待っていた言葉だったのか、院長婦人は不適な笑みをこぼし、ゆっくりと私の方へと歩を進めた。

「健太郎、あなたにもいずれ話そうと思っていたのよ」

「僕に？　一体、何を話そうと思っていたんだ？」

気味の悪い鮮やかな赤い口紅が、艶やかに光る唇の口角を限界まで上げ、目じりの上がった鋭い瞳を八雲先生に押し付けた。

「杏さんはね、あなたのクローンなのよ」

冷静に、かつ大胆に院長婦人は理解できない言葉を吐き出した。

私が、八雲先生のクローン？　一体、何の話だろう？　第一、私と先生が出会ったのはついこの間のこと。その私たちが、クローン

ですって？ 全く話がわからない。

「母さん、杏さんがクローンだって？ 何をわけのわからないことを言っているんだ？」

八雲先生も院長夫人の言葉をどう理解して良いのかわからないよ
うだ。

兄の座るソファに、兄の奥さんも並んで腰をおろし、院長婦人の話を見守っていた。

「院長婦人、その話は……」

母が、泣き崩れそうになりながら、院長婦人にすがりつくように言った。院長婦人は、母を切り捨てるような冷やかな視線を送るだけだった。

「奥さん、約束を忘れたんですか？ 忘れるはずがありませんよね。こんな大事な話ですもの。いずれは、話さなければいけないことは、おわかりでしょう？」

「……はい」

院長婦人は、なぜか両親に対して上から物を言い続けた。軽蔑するかのような目で、両親を見ている。その瞳は冷たく、血が通っていないかのようだった。

「杏さん」

院長婦人が、突然、私に話し掛けてきた。私に対しても血の気の無い鋭い視線を送った。

「あなたは、私の息子、健太郎のクローンなのよ」

「……」

口をぽかんと開けて、その言葉を聞いた。何度聞いても、皆目見当がつかない。

「突然、こんなことを言われても、わからないのは無理ないわね。

実はね……」

院長婦人は、誰もいないような静まり返ったこの病室で、一人、ゆっくりと話し出した。

母は、この病院で兄を出産したそうだ。このことは、私も小さい

ころに聞いていた。兄は、生まれつき、手足に障害を負ってしまい、この病院での入退院を繰り返すことになってしまったのだ。

我が家は、決して暮らしが豊かとは言えず、どちらかと言えば貧しい方だった。兄の介護をしなくてはならないので、母は働きに行くこともせず、父だけの収入で何とかしようとしていたのだ。

しかし、父の会社はあまりうまくいっておらず、収入は増えるどころか減ってしまった。その上、兄の手術の費用などもかさみ、生活は苦しくなる一方だった。

もう手術費用を払うことは出来ない。治療費を払うことが出来ないと、そう思っていたときに、院長婦人がある話を持ちかけてきた。

私の子供のクローンを産んで頂戴

クローンを産んでくれれば、治療費は一切もらわないと。それだけではない。生活費も援助しようと言ってきたのだ。

もちろん、この話を最初は断ったそうだ。しかし、どうしようもなく生活は切り詰められ、兄の介護に疲れ果てた母は、決心したのだった。

父は、そんなことをする必要はないと母を説得したのだが、苦しい生活を考えると、受け入れざるを得ないと判断し、院長婦人の話を受け入れることにしたそうだ。

そして、無事に私を出産した。

「ちよっと待ってくれ、おかしいじゃないか。彼女が、僕のクローンであるとしたら、僕と同じ男性でなくてはならないはずだ」

院長婦人の話をさえぎり、八雲先生が疑問を呈した。右手を上げて、院長婦人の注意を仰いでいた。それを見た院長婦人は、待っていたようにその疑問に答えた。

生まれてきたのが、男の子ではなく、女の子。つまり、私が生まれてきたことに、院長婦人は激怒したそうだ。

私を馬鹿にしているの！クローンを産んで頂戴と言ったはずなのに、これはどういうことなんですか！自分たちの子供を産んで、その費用を私に払わせるつもりですか！

両親は、死ぬほど驚いたそうだ。男の子が生まれるはずなのに、女の子が生まれたのだから。しかし、どう考えてもクローンに違いないと思ひ、反論したそうだ。

そこで、ありとあらゆる検査をすると、私はどう考えても八雲先生のクローンだと考えざるを得ないと言つ結論に達した。

「男から女のクローンが生まれることは、全く考えられないとは言えないでしょう？ Y染色体がなければ、女が生まれてしまうのだから」

院長婦人が、落胆しつつ穿き捨てた言葉に、八雲先生は返す言葉がなかった。

私には、Y染色体と言われても、何のことだかわからない。ただ、これだけはわかった。私は、間違いなく八雲先生のクローンである。私は……クローン……。

母は、唇をかみ締め、自分のハンドバックから薄いピンクのハンカチを取り出し、目頭を強く押さえつけた。父は、母の肩を抱き、ぼんぼんと叩いた。かすかに、父の目じりから何か光るものが見えたような気がした。

兄夫婦は、ソファに座りながら、お互いの顔を突き合わせていた。兄は、目からあふれんばかりに涙をためていた。それに気づいた兄の奥さんが、目の前のテーブルに置いてあるティッシュを取り、兄の涙を優しくぬぐった。肩が震える兄を私は、黙って見ることに出来なかつた。

八雲先生は、上げていた右手を下ろし、ベッドに両手を押し当て、頭をもたげていた。院長婦人は、勝ち誇った顔で、その場に立ち続けていた。

私は、一寸も動けず、ベッドに座り、周りを眺めた。

まだ、その言葉を受け入れることが出来ていない。私が、クローンだなんて、どう信じると言つもの？

今まで、ずっと両親と兄の四人でつましく暮らしていた。裕福とは言えないけれど、私は幸せだった。それが、どういう意味なのか

説明は出来ないけれど、とても人間らしい生活を送ってきたと思う。ともに笑い、泣き、怒られることもたくさんあったけれど、この生活をずっと続けていけたらと思っていた。兄が、結婚し独立した後も、私はみんなに包まれて、毎日を楽ししいと感じていた。

クローンが、こんなに人間らしい生活を送るだろうか？

全く的外れな考え方もかもしれない。例えそうだとしても、そういう考え方しか、今は出来ない。

ポタポタと床に何か、水滴が落ちる音がかすかに聞こえた。どこからするのだろうか？ 私は、水滴の落ちる場所を目で探した。それは、意外にも近く、八雲先生の真下にあつた。

八雲先生が、ベッドに両手を押し当てて、床に顔を向け、誰にも涙を見られないように涙を流している。私からは、全く八雲先生の表情を窺い知ることは出来ない。しかし、確実に言えることは院長夫人の言葉に、深く傷を負ったと言うことだ。八雲先生は、院長夫人の言葉を受け止めている。そして、その悲しい現実には涙を流したので。

これが、普通のことなのだ。これが、当たり前前の反応なんだ。

八雲先生の姿を見ていたら、私まで体の奥底から熱いものを感じてしまった。

受け入れなくてはならない現実なんだ

一人だけ、悲しい表情をしていない院長夫人は、少し不満げな表情で、あたりを見回した。何を湿っぽいことをみんなですべてしている？ とでも言わんばかりの強気の表情だった。

「杏………、ごめん」

それは、とても小さく、八エでも飛んでいたらかき消されてしまふいそうなほどの声だった。父が、母の肩を抱きながら、天を仰いで無念そうに言ったのだった。俯き、父は目を強く瞑って涙をこらえている。

何か、言葉を返したい。そう思うのに、適当な言葉が浮かんできなくてれない。私は、ゆっくりと首を横に動かした。父が、それを見

ていないことはわかっていたが。

廊下からは、相変わらず足音ひとつ聞こえない。誰もこの病室に近づこうとはしていないようだ。院長婦人が、看護師にここには近づかないように耳打ちしていたのかもしれない。

「このことを知ってしまった以上、野高さんたちに杏さんを預けることは出来ません。これからは、私たちが杏さんを引き取りたいと思います」

院長婦人は、表情ひとつ使えずに、淡々と言った。それを聞いた八雲先生は、院長夫人に強い視線を送った。

「母さん、それはどういうことだ？ 私たちが引き取るって、杏さんを一体どうするつもりなんだ？」

「私たちの家に来てもらうんです。そして、自由な行動は一切禁止します。大事な人ですからね。逃げられでもしたら大変じゃないの。杏さんは、大事なクローンなんですから」

私から、一切の自由を奪う発言。それは、とても冷酷で残忍な言葉に聞こえた。

私は、大事なクローン。

その言葉が、私の中で駆け巡る。

私が、俯いていると、院長婦人が右手で私のあごを持ち上げた。

「杏さん、あなたは私たちの大事な跡取り子のクローンなんですからね。良いですか、これからは、決して自分勝手な行動は許しません。逃げようとしたって、すぐに捕まえますから」

院長婦人の顔が、鬼に見えた。人とは思えない表情で、私を一括した。

その言葉は、ただの脅しだろうか？

しかし、両親の顔を見ると、脅しとは到底思えなくなった。二人とも顔を真っ青にし、大きなショックを受けているようだった。

私は、これから一体どうなってしまうのだろうか？

みんなが、出て行ったあとの個室は、いつも以上に悲しみに満ち

溢れていた。さつきまで、兄夫婦が座っていたソファも、父が閉じた窓もカーテンも、八雲先生が握り締めたシーツも、全てが悲しみの色に染まっている。

枕もとにあるウサギのぬいぐるみだけが、笑顔のままだ。小さな目、垂れ下がった耳、愛らしい口。ぬいぐるみを抱きしめずにはいられなくなった。枕もとにあるぬいぐるみを手にとると、すぐにぎゅっと抱きしめた。まるで、八雲先生が、私にしてくれたように。押しつぶれてしまいそうなくらいにぬいぐるみを抱きしめ、眠るように目を瞑った。

運命が、私を交通事故に遭わせたことは、間違っではないなかった。だけど、私は誤った解釈をしてしまった。運命の赤い糸が、私をここへ呼んだのだとばかり思っていた。

本当は、そうではなかった。私と八雲先生が、同じ歯車を持っていくからだ。私たちは、会うべくして会った。しかし、決して結ばれてはいけないのだと。

こんなに強く、情熱的に人を想った事はなかったのに。ぬいぐるみを抱いている手に、ぼたぼたと熱いものが流れていることに気がついた。私は、泣いているんだ。

それが、八雲先生と結ばれてはいけない運命だからなのか、自分が八雲先生のクローンだからなのかは、わからない。

理由もわからないまま、私の目からは涙が絶え間なく零れ落ちた。もう一度、自分を取り戻すかのようにぬいぐるみを強く抱きしめた。零れ落ちる涙で、シーツがぬれていく。私は、それを見たくないわけではないのに、ぎゅっと硬く目を瞑った。

ソファもカーテンもシーツでさえも、私を哀れんだ目で見ているような気がした。ウサギのぬいぐるみだけが、私に温かいまなざしを送ってくれる。

シーツの同じ場所に零れ落ちた涙で、ぐっしょりと一箇所だけぬれてしまった。じんわりと、私のパジャマのズボンを通し、私はそれを感じた。

急いで、顔をあげて、シーツのぬれた場所を見ると、楕円の形にぬれた後がくつきりつついていた。

強く抱きしめ続けたウサギのぬいぐるみを見ると、少し薄っぺらくなったような気がした。やさしく耳をよけながら頭を撫でて、枕もとにおくと、ようやく涙が止まった。

ベッドの横の台に置いてある手鏡を取り出し、自分の顔を確認した。案の定、私の目は一目で泣いていたのがわかるくらいに真っ赤に腫れていた。

誰も来なければ良いけれど。まだ、面会時間は少し残っている。パン屋の仲間が来たらどうしよう。泣いていたことが、すぐにわかっってしまう。

今日は、誰も来て欲しくないと思っていたけれど、面会時間が残りわずかになったところで、両親がやってきた。

「どうしたって言うのよ、こんな時間に」
すでに、声は落ち着きを取り戻していた。しかし、まだ、私の目は完全に回復しておらず、両親は、私の顔を見るなり、驚愕の表情を見せた。

「杏！ どうしたんだ？ 泣いていたのか？」
父が、崩れ落ちるようにベッド脇においてある椅子に座った。カーディガンをシーツのぬれた場所に置いたので、両親はシーツがぬれていることには、全く気がついてはいないようだ。

「お父さん、心配しないで。それより、どうしたのよ。いつも、こんな遅い時間に来たことなんてなかったじゃない」

私の方が親になった気分、父に言った。母は、父の後ろで全てを父に託すと言う目で父の背中を見ていた。

「杏、逃げよう。これ以上、ここにいるべきじゃない」
父は、身を乗り出した。今すぐにでも、私の手を取って、ここから私を連れ出したいのだろうと言う思いが伝わってきた。

「お父さん、私は逃げるつもりはないわ」
父の気持ちは、よくわかる。きっと、母も同じ気持ちに違いない。

私が、両親の立場だったら、同じ事をしていただろうとも思う。

でも、私はどこにも逃げたくはない。悲しい気持ちは持っているけれど、ここを逃げたいと言う気持ちは持っていない。なぜか、私は、院長夫人の言葉に従うと言う気持ちを持っている。

「どうしてだ？ このまま、杏がここに続けられたら、どうなるかわからないんだぞ！ 万が一、八雲先生の体に何かが起こってしまったら、杏はただじゃ済まされないんだぞ！」

よほど緊張していると見られ、父は額にびっしょりと汗をかいていた。息は荒く、必死さが痛いほどに伝わってきた。

「そうかもしれないけれど。八雲先生が、一生健康で、私の体を必要としないかもしれないじゃない」

「例えそうだとしても、杏の自由は一生奪われてしまう。父さんたちは、杏に幸せになって欲しいんだよ」

私の手を父は、がっしりと握り締めた。温かい手、熱い手と言った方がいいかもしれない。どれだけ、父が興奮しているのかを強く感じた。

母が、反対側に移動して、私の肩を温かい手で、優しくさすってくれた。

「杏。今、ここを出なければ、私たちは二度と会えなくなってしまうかもしれないのよ。確かに、私たちは院長夫人にクローンを産むことを約束したわ。そして、あなたを産んだ。あなたは、確かに八雲先生のクローンよ。でもね、私たちの子供でもあるのよ。杏を院長夫人に渡さなければ、約束を破ることになる。恩を仇で返すことになってしまうけれど、その方が良いと思うのよ。杏には、杏の権利がある。クローンとは言え、ひとりの人間なのだから」

母の説得は、温かく、愛情に満ち溢れていた。私の幸せを両親ともに願っているのだと。その気持ちは、とてもうれしい。こんなにも、私を思ってくれているのだから。

母の手は、相変わらず私の背中を優しくさすってくれていた。父は、椅子に座ったままで、目で私を訴えていた。

「気持ちには、とてもうれしいけれど。ここを逃げて、無駄なような気がするよ。もし、今、ここを出たとしても、また、すぐに院長夫人や八雲先生と出会うてしまうような気がする。偶然とは言え、事故に遭ってこの病院に運ばれてしまったんだし、それが、私の運命だと思っ」

両親は、それでも説得を止めようとはしなかった。しかし、面会時間が終わってしまい、さすがの両親も帰っていった。

ここを出ることが、一番よかったのかもしれない。

そう思うのに、なぜかまったく後悔はしていない。これでよかったのだと思うくらいだ。

昼間の院長夫人の顔が、急に私の頭に浮かんできた。人間とは思えないような表情。夢に出てきそうなくらいに怖くなった。

電気を消し、ベッドに横になり、枕もとのぬいぐるみをちらりと見て、静かに目を閉じた。

眠りに入ろうとしたときに、誰かが扉をノックした。ノックしたと思うと、すぐに扉は開き、八雲先生がこっそりと中に入ってきた。肩を縮め、外に誰もいないことを確認したのか、すぐに扉を閉めずに、外をきよるきよると見回してから、音がしないように丁寧に扉を閉めた。

「先生、どうしたんですか？」

足音を立てないように慎重に急いで八雲先生が私のもとへ来ると、私は体を起こした。八雲先生は、私に顔を近づけ、小声で話し始めた。

「退院の許可を出す。だから、すぐにここを出るんだ」

真剣な眼差しで、私をまっすぐに見つめる瞳。その瞳に導かれるように、私はここを出てしまおうと言う気持ちになりかけた。しかし、ここを出ても無駄だろうと言う思いが私を冷静にさせてくれた。「それを言いに、やってきたんですね。両親も同じことを言っていました。早く、ここを出るべきだって。でもね、先生。私は、ここを出る気はありませんから」

八雲先生は、息を飲み、赤くあとがついてしまいそうになるくらいに私の両肩をつかみ、より一層顔を近づけた。

「何を言っているんだ！ このままここにいたら、母さんに自由を奪われてしまうんだ。それに、僕は、健康には気を使っただけで、小さいころから心臓があまり強くはない。移植するほど弱くはないが、これから先、どうなるかは全くわからないんだ。杏さん、やっぱり、ここにいてはいけない」

八雲先生の心臓は、あまり強くない。小さいころからと言うことは、院長婦人はそれを知って、私を作ったのかもしれない。

何も言わない私に、八雲先生はいらついているように見えた。

灯りのない病室に、カーテンの隙間から月明かりが入ってきた。月明かりは、ソファの方を照らしているので、八雲先生の表情を正確に知ることは出来ない。

「不思議です。その言葉を聞いても、私はどこかへ逃げたいとは思えません」

「そんな事を言っている場合か！ 駄目だ。ここにいてべきじゃない！ 実は………本当は、ずっとそばにいて欲しいと思っていったんだ」

力強く私の肩をつかんでいた手を離れた。

「杏さんに、僕は運命を感じたんだ。僕をこんな気持ちにさせてくれた人は、今まで一人もいなかったからね。きっと、僕たちは結ばれる。ずっと、一緒にい続けるだろうって思っていたんだ。その気持ちも、母さんの言葉で全てが水の泡となってしまった。今でも、信じられないんだよ。杏さんが、僕のクローンだって言うことを。しかし、それは紛れもない事実だ。こんな現実、受け止めたくはない。そう思っても、現実を受け止めなくてはならないんだ」

八雲先生の声が震えている。その瞳に、涙のしずくが光っているのがかすかに見えた。

「受け止めたくないけれど、受け止めざるを得ない。もう僕たちは、会わない方がいいんだ」

八雲先生の頬を涙が伝った。あごにたまった涙が、くつついてはなれない。悲しい現実を自分に受け止めさせるように八雲先生は、私に訴え続けた。

「確かに先生の言う通りかもしれないけれど、私の気持ちは変わりません。私はここにいます」

何を言われようと、頑として動かない私の気持ちに、八雲先生は手詰まりを感じているらしい。

みんな、私をここから逃がそうと思っている。八雲先生に何かあってからでは遅いと。

例え、私がここから遠いところへ行つたとしても、クローンであることには変わりない。だけど、どうしてここから逃げたくないのか、理由を聞かれても、それはわからない。

改めて思うことは、私は、想像以上に、周りの人から愛されていると言ふこと。普段、何気なく生活しているだけでは、こんなに温かい愛情に気が付くことはなかっただろう。生まれたときから、ずっと一緒にいた家族、そして、最愛の八雲先生。

みんなが、院長婦人の理不尽な提案を必死で、拒否するように訴えてくれる。

しかし、私はこれも運命なのだと思うと、こんなにも愛情を感じているのに、そちらを受け入れようとは思えない。

とうとうギプスをはずす日がやってきた。八雲先生が、私の右足にはめてあるギプスを丁寧にはずしてくれた。ずっと、痒くてたまらなかった。八雲先生はギプスをはずすと、難しい顔で私の方をじつと見つめた。私は、その意味を知りたいとは思わなかった。きつと、私に伝えたいことがあるはず。でも、それを受け止めたくはなかった。

ギプスの外れた右足。久しぶりに見た、私の右足。左足なら、ずっと見ていたと言うのに、久しぶりの右足とのご対面に、何か懐かしさを感じてしまった。

ギプスが外れるまで、まさか入院しているとは想像もしていなかった。普通は、こんな長く入院なんてしないんじゃないかと思う。久しぶりに洗った右足。やっと、さっぱりした。ギプスをはめているときは、気にしないようにはしていたけれど、痒いしなんだか気持ちが悪かった。右足だけが、自分の体と切り離された妙な感じがしていたが、ようやく自分のところに戻ってきた気分だ。

もう大分右足はよくなっている。となると、退院の日も近いはず。院長婦人は、私をどうするつもりなのだろう？

八雲先生の母親だと言うのに、そこには全く血のつながりを感じられないくらいに、院長婦人は冷酷な顔をしていた。でも、二人は親子なんだ。血のつながりだってある。

そして、私と八雲先生は全く同じなんだ。一目見て、全身に電気が走ったと思ったのは、恋ではなかったのだろう。この人が、運命の人なんだとさえ思ったけれど、八雲先生と私が、全く同じ人間だから、何か他の人とは違うものを感じたのだろう。八雲先生も私を一目見て、何かを感じ取っていたと言っていた。

二人とも勘違いをしていたのだ。それを恋だと思ってしまった。本当は、違うのに。

それがわかったと言うのに、私の中では、まだ、八雲先生を恋愛対象として見てしまっている。

ギプスはずして最初の見舞い人は、兄だった。個室に入ってきたのは、すぐにベッドの横においてある椅子に座り、ギプスの取れた私の足を、兄は、自分のことのように嬉しそうにじっと見ていた。「よかったよ。本当に、安心したよ。やっと、ギプスが外れたんだな」

兄が、一番心配していたのだろう。兄の心から喜んでいる笑顔に、私までつられてうれしくなってしまった。

「ずっと、右足が痒くてね。やっと、これで右足の痒さから開放さ

れたって感じだよ」

右足を少し上げ、兄に見せ付けるように右足を兄に向けた。ニコニコしながら私の足を眺めていたのに、兄は突然、表情を曇らせてしまった。

「お兄ちゃん？ どうしたの？」

兄は、涙を隠すように俯いた。しかし、すぐにゆっくりとけだるそうに頭を上げ、私をまっすぐに見つめた。

「杏、ごめんな。お兄ちゃんのせいで、杏を苦しめてしまって……。僕が、こんな体でなければ、杏がこんな苦しい思いをしなくてすんだのに」

それが、何をさしているのかは、すぐにわかった。兄は、私がクローン人間として生まれてきたことを、自分のせいに行っているのだ。「お兄ちゃん、何を言っているの？ お兄ちゃんのせいなんかじゃないわよ。これはね、誰もせいでもないのよ。そういう運命なんだから」

自分のせいにしないで欲しい一心で兄に言ったのだが、かえって兄はその表情を曇らせてしまった。

「良いんだよ。お兄ちゃんにそんなに気を使わなくても。僕は……。なんて、兄なんだ」

兄がまた俯いた。頭を上げる元気すらないのかもしれない。あまにも受け入れがたい現実を知り、精神的に兄はかなりのショックを受けているのだろう。どす黒い雨雲が兄の頭上を襲っているのか、兄からは悲痛な叫び声を揚げているように見えた。

「別に、気なんて使ってないわ。仕方がないことだもの。いまさら、文句を言ったところで、この運命は変えられない。クローン人間として生きていくしかないじゃない」

自分でもこれが本心だと断言は出来ないでいる。本当の自分の心なんて、どこにあるのかはわからない。

兄が上目遣いで私の顔を見つめた。その瞳は、とても悲しい表情を浮かべていた。

「杏、もう受け止めてしまったのか？」

たった一言、兄は冷静に、悲しげに兄の感情を集約して言葉を発した。

「どうやら、そうみたいよ」

私は、苦笑した。

兄は、ここから逃げ出すべきだとは、一言も発しなかった。ただ、謝罪するだけだった。兄は、私のこれからの運命を予想しているのだろうか？ ただ、クローン人間として生まれてしまった私に、謝りたいだけなのだろうか？

当り障りのない話をしたいと思っていたけれど、兄はすぐに帰ってしまった。兄の心の傷は、私より深いようだ。

新しい生活

ギブスが外れると、すぐに退院することになった。八雲先生も両親も私を早く、病院から出るように説得したけれど、私はそれには応じなかった。院長夫人の計画通りに、私は進むことに決めたのだ。退院の日を決めたのも院長夫人だった。

退院の日は、誰にも告げないようにと院長婦人に言われた。八雲先生すら知らないようだ。私は、約束どおり、誰にも退院の日は告げなかった。

退院の日、院長婦人に連れられて、病院前においてあるリムジンに乗り込んだ。初めて間近で見るリムジン。初めて乗るリムジン。私が、乗ってもいいのだろうかと思うくらいにまぶしかった。

リムジンに乗ると、行き先も告げられず、どこに行くのか見当もつかず、ただ、リムジンに揺られるだけだった。

もう二度と、先生には会えないのかな。

リムジンから外の景色を見ては、そう思った。病院を出ると、思いの公園を通り過ぎた。たった一瞬しか見えなかったけれど、八雲先生と内緒で行ったあの公園だ。あの日のことを思い返した。どこに連れて行かれるのかわからない中で、ドキドキしながら、八雲先生が車椅子を押してくれたんだっけ。あのときの気持ち、にわかによみがえった。

あの日の空は、今日のように雲がぶかぶかと浮かんでいただろうか。青い空に、気持ちよさそうに浮かぶ白い雲を見ながら、あの日の空を思い出そうとした。

しかし、思い出されるのは、八雲先生の温かい笑顔ばかり。空なんて、全然覚えていない。私は、八雲先生ばかりを見ていたようだ。

リムジンの中で、私は後部座席に座った。運転席の真後ろだ。院長婦人は、助手席に座っている。後ろから見る院長婦人は、正面から見たとき以上に妖艶で恐ろしさを感じた。

「杏さん」

院長婦人の不気味な後頭部を見ていると、突然話し掛けられた。バックミラーにでも、私の姿が写っていたのだろうか？

「何でしょうか」

何も悪いことをしていないのに、心細い声で答えてしまった。

「今日からは、我が家の召使をしてもらいます。他にも召使がいるので、詳しいことは彼女に聞いてください。そして、あのことは、決して口外しないように」

全くこちらを見ないで、院長婦人は強い口調で話した。顔を一切見ていないのに、恐ろしく目を吊り上げている院長婦人の顔が、頭に浮かんだ。

あのことと言うのは、きっと、私がクローンだということだろう。言われなくても口外なんてする気はない。

何時の間にか、車は私の知らない場所を走っていた。

見たことのない場所、見たことのない景色に目をやると、高級住宅街が目に入ってきた。どの家も、頑丈な塀に囲まれ、立派な建物がその中に入った。大きな庭がある家もあった。それらの庭には、手入れの行き届いた樹木が植わってあった。庭のある家は少ないけれど、目移りしそうなほど、どの家も誰もがうらやむくらいに広く豪華な家だった。

その中でも、ひときわ大きい家があった。塀が見えるのに、なかなか門が見えてこない。一体、どこに門があるのだろうか？ どんな人の家だろうか？ わくわくしてその家の門を待っていると、リムジンはその家の門の前で、一度止まった。数秒後、門が開くと、リムジンは当然のように吸い込まれるように門の中へと入って行った。

もしかして、ここが八雲家なのだろうか。こんなにすごい家に住んでいるのだろうか。院長婦人の身なりを見ると、この家が八雲家なのも頷ける。

門を入ると、広くて、整えられた庭が現れた。庭師に整えてもらっているのだろうか、容易に想像できるほど、木々は全て手入れが

施され、綺麗な芝が庭銃を埋め尽くしていた。

車寄せにリムジンが到着すると、玄関にはすでに中年女性が待っていた。

運転手が、すぐに車を降りると、助手席に回り、院長婦人をエスコートした。私は、後部座席からそれを見て、院長婦人が車から降りて、ドアが閉まってから、自分で車から降りた。

「お帰りなさいませ、奥様」

玄関の中年女性が、院長婦人に会釈をしながらそう言った。やはり、この人は召使に違いない。院長婦人の斜め後ろでその光景を見ていた。

「奥園さん、今日からあなたと一緒に召使として働いてもらう野高さんです」

「はじめまして」

ついで早々、院長婦人は、私のことを召使の女性に紹介した。彼女は、奥園さんと言うらしい。奥園さんは、院長夫人とは正反対に優しく目が垂れ下がり、温かい視線を私に送ってくれた。

建物の中に入ると、院長婦人と別れ、私は奥園さんと一緒に行動することになった。

まず、荷物を置くこともあって、奥園さんに私が寝泊りする部屋に連れて行ってもらった。その部屋は、建物の地下にあった。行ったことはないけれど、テレビなどで見る西洋の豪華な洋館と言った建物には、じゅうたんが敷き詰められ、足音が聞こえない。外の庭は、和の雰囲気だったのに、この建物は、日本にいることを忘れさせた。

建物の中は、明るいところばかりなのだが、地下への階段は、薄暗かった。じゅうたんも敷いていない。コツコツと奥園さんと私の足音が響き渡った。

階段を下りると、やはりそこは薄暗かった。電灯はついてはいるけれど、決して明るくはなかった。地下は、倉庫なのだろう。扉がたくさんあるけれど、そこにはワインやら食料などの札が下がってい

た。

廊下の一番奥の部屋に着くと、ここが、私が寝泊りする部屋だと言われた。中に入ると、あまり広くはなく、と言うよりも狭いと言った方が良くくらいの広さの薄暗い部屋だった。

ほこりまみれの机と古くなったベッドが置いてあった。ベッドの横には、一人用の荷物がやっと入るくらいの薄汚れた洋服ダンスがあった。

「ごめんなさいね。きれいにしておきたかったんだけど、まさか、野高さんが、ここで寝泊りするとは思わなかったから。今朝、急に奥様に言われてね。もっと早く言って下されば、きれいにしておけたんだけど」

奥園さんは、苦笑いを浮かべながらも申し訳なさそうに言った。

「良いんですよ。自分で掃除しますから」

掃除道具を借りて、すぐにも掃除をはじめようと思ったのだが、その前に、この建物を案内してもらったことになった。

建物は、三階建てで、大広間やら院長婦人の部屋、院長の部屋から、お風呂・トイレはもちろん、調理場など隅々まで案内してもらえた。

その中には、八雲先生の部屋も含まれていた。八雲先生は、この家に住んでいるのだ。ご両親とは、部屋は離れていたが。

廊下には白い壁に大きな絵が何箇所にも飾られていて、大きく使い込んだと思われる古時計まであった。手入れが行き届いているからか、その古時計は今も時を刻んでいる。どれをとつても、テレビに出てきそうなものばかりだ。何か、自分だけが浮いた存在のような気がしてならない。

一通り案内してもらったと、私の部屋に戻り、奥園さんと二人で掃除をはじめた。

「野高さん、さっきからずっと気になってたんだけど、奥様のことを怖がっていないかしら？」

奥園さんは机の上を丁寧には拭きながら、私とは少しも視線を合わ

せずに言った。そう、私は、院長夫人を怖がっている。人のあたたかさを感じない院長婦人とは、あまり会いたいとは思わない。それを奥園さんは、一目で見抜いてしまっていたようだ。

「わかりますか？」

天井のほこりをはらいつつ、台に落ちそうになりながら、必死にそう答えた。

「あら、大丈夫？ そりゃ、すぐにわかるわよ。確かに、今の奥様は、誰もが怖がっているようだしね。でも、昔はあんなに怖くなかったのよ」

奥園さんは、私がバランスを崩し、台から落ちそうになったので、それを気遣いながらも穏やかな声で話し続けた。

「昔って、奥園さんは、いつからここにいらっしゃるんですか？」

「私は、奥様がここに嫁いでこられる前から、ここでお手伝いをしているのよ。だから、奥様のこともよく知っているの。旦那様と奥様は、お見合いで結婚なさったのよ。旦那様は、大病院の跡取り息子。奥様は、大財閥のお嬢様。若いころの奥様は、可憐で華奢で、この家の奥様としてやっていけるかしら？ と思うくらいだったわ」

可憐だの華奢だの、今の院長婦人からは、想像もできないような言葉が出てきた。

奥園さんは、机の上を拭き終わると、机の引き出しや脚、椅子をきれいに拭き始めた。

「奥様はね、とつても細くてね。今も細いけれど、昔はもつともつと細かったのよ。そのせいか、なかなか子宝に恵まれなかったのよ。そのことを大奥様にいびられて。毎晩のように泣いていたそうよ」

「跡取を早く産めと言うことですか？」

「そうなのよ。奥様は、ずっと不妊治療をなさっていてね。それで、ようやくお坊ちやまがお生まれになったのよ。生まれたのが、男の子だったから、大奥様もそれからは何も言わなくなったわ。でもね、奥様はそれからがもつと大変だったのよ」

奥園さんは、神妙な面持ちで、動いていた手を休めて、きれいに

したばかりの椅子に腰をおろした。私も、新しいシーツを敷いたばかりのベッドに腰をおろした。

「一体、何があつたんですか？」

「それがね、奥様が二人目を妊娠なさったときのことなんだけど、妊娠がわかったときは、とても喜んでいらしたのよ。でもね、その直後に子宮ガンがあることがわかったのよ。奥様は、子供をあきらめたくはないとおっしゃっていたんだけど、子供をあきらめて、手術をしたのよ。気がつくのが遅かったこともあつて、子宮を全て摘出されたそうよ」

あの院長婦人にそんなつらい過去があつたなんて。あんなに凶たく、恐ろしい瞳の奥には、悲しい過去を隠していたんだ。

女性にとつて、子宮を失うと言うことは、女性を捨てると言うことと言つても過言ではない。そのせいなのだろうか。奥園さんの話の中の院長婦人と今の院長婦人が違うのは。

「それに、奥様は自分の息子であるお坊ちやまをあまり抱かせてはもらえなかったのよ。大奥様が、そうしたの。お坊ちやまは、ほとんど私が育てたようなものね。それでも、大奥様の目を盗んでは、奥様にお坊ちやまを抱かせたものよ」

「どうして、大奥様は奥様に健太郎さんを抱かせなかつたんですか？」

奥園さんは、静かに腕を組み、頭を垂れて少しの間考え込んだ。

「大奥様から、理由は聞いたことがないけれど、きっと、お坊ちやまがかわいかつたんだと思うわ。旦那様を取られたシヨックもあつて、お坊ちやまを自分のものにしたかつたのかもしれないわね。それに、お坊ちやまは、生まれつき心臓が人より弱かつたから、それもあつたのかもしれないわ」

薄暗い照明の下で、奥園さんと私は話しこんだ。

八雲先生の心臓が弱いのは、生まれつきだつたのだ。本人から、心臓が強くないとは聞いていたけれど。

掃除が終わると、私と奥園さんは、夕食の準備に取り掛かつた。

少し前までは、専門の料理人を雇っていたそうだが、その人が、自分の店を出すと行って辞めてしまったそうだ。

私たちは、食事の準備をし終わると、調理場で簡素な夕食を済ませた。

「夕食の後片付けが終わったら、今日の仕事は終わりよ。いつも、朝食から夕食までと決まっているの。私は、後片付けが終わったら帰るわね。明日は、朝食の準備をする時間に来るから」

食べながら、奥園さんはそう言った。奥園さんは、私に丁寧にこの家のことを教えてくれる。その奥園さんが、夜はいない。たったそれだけのことなのに、強い孤独感に襲われた。

私たちの夕食が終わってから、しばらくすると院長婦人の食事も終わった。その席には、八雲先生もいたらしい。食堂にはすでに誰もおらず、空の食器だけが並んでいた。

食事は必ず家族だけですという。食堂から人気がないのを確かめてから、片付けをしなくてはならないそうだ。今日は、院長婦人と八雲先生の二人だけの食事だったらしい。

「私の作った料理は、美味しかったのかしら？」
きれいに料理を食べきった八雲先生が使った皿をまじまじと眺めて、私は無意識にその言葉を口ずさんでいた。

「きつと、喜んで食べてくださったわよ。ほら、こんなにきれいに食べてあるじゃない！」

広い食卓のテーブルの正面で皿を片付けていた奥園さんが、私に向かって空になった目の前にある皿を私に見せた。

そうよね。何を心配しているんだろう。早く、後片付けを済ませなくてほ。

八雲先生は、私がここで住み込みで働くことを知っているのだろうか。どうか知らないで欲しい。もし、まだ、そのことを知らないでいるのなら、そのまま知らないままでいて欲しい。

一つ屋根の下に暮らしてはいるけれど、この生活だったら、八雲

先生と顔を合わせることはないだろう。その体温を感じることはあっても。

高級な食器を片付け終わると、奥園さんが帰ってしまった。

それから、毎日、同じようなことの繰り返しだった。奥園さんと二人で、召使としてこの豪邸を掃除したり、洗濯したり、食事を作ったり。

掃除は、軽く済ませる程度だった。月に一度、業者を頼んで徹底的にきれいにしてしまう。そして、庭師も月に一度は来てもらっている。

ただ、私にとっては苦痛の日々でしかなかった。この豪邸の外に出ることはなく、また、八雲先生とも顔を合わせることはなかった。八雲先生の衣服を洗濯したり、八雲先生が食事した食器を片付けたりするのは、心臓をえぐられるほどに悲しくて仕方のないことだった。

これが、一番良いんだと自分に言い聞かせるものの、それらを目の当たりにすると、体の奥底が熱くなってくるのだった。

奥園さんのいない夜は、とても寂しかった。地下の奥にある自分の部屋で、一人ぼっち。お風呂とトイレは、部屋のみ隣にあるので、行動範囲はとても狭い。

静まり返った廊下から、誰かの足音が聞こえてきた。部屋には、テレビもラジオもないので、廊下の音は、全て響き渡ってしまう。

誰が来たのかを想像することもなく、私は扉の方を固唾を飲んで見つめた。

ノックをせず、誰かが扉を開けた。

八雲先生……

なぜ、八雲先生がここに？ とてもこれが真実だとは思えない。

八雲先生が私がここにいることを知っていたということなのだろうか？

八雲先生は、私を見るなり、扉の近くに置いてある古びた椅子に座っている私を強く抱きしめた。

「会いたかった」

涙を飲み込みながら言ったその言葉は、とても小さく私の耳に響いた。抱きしめる八雲先生の力が強すぎて、少し痛い。会ってはいけない人だと思つのに、私は素直に喜んでゐる。

「先生」

声をかけると、八雲先生はその手をやさしく緩めた。

「何？」

「どうして、ここへ？」

八雲先生は、私の目の高さにあわせて中腰になった。そのおかげで、私たちは強く見つめあつた。八雲先生は、私の肩を強くつかみ、私の心を吸い取つた。

「今日の昼間、奥園さんにはったり会つてね。そのときに、新しいお手伝いさんが来たと聞いたんだ。名前を聞いて、驚いてね。母さんの目を盗んで、ここに来たんだ」

いつもの優しい瞳の八雲先生。その瞳を見ると、私はどうしても心が揺らいでしまう。ずっと、その瞳に抱かれてしまいたくなってしまう。

落ち着いたのか八雲先生はベッドに座つた。私は八雲先生から視線をはずし、ひとつ深呼吸をした。

「先生、もうここには来ないで下さい」

静かな部屋に私の冷めた声がこだました。

「どうして？ 僕は、毎晩ここへ来たいと思つているのに」

その言葉に、私の心は大きく揺さぶられた。許されるのならば、私だってそうしたい。だけど、私には大事な使命がある。決して、八雲先生に恋をするために生まれてきたわけではない。私は、八雲先生のスペアのようなものだから。

「私たちは、会わない方が良いと思つんです。同じ遺伝子を持ったもの同士ではないですか。近くに良いことは良いとしても、顔を合

わせるのはあまり良いことではないと思います」

八雲先生を飲み込むような目で、私は強く訴えた。八雲先生も私の気持ちを察してくれたのか、全身のため息をついた。

「確かにそうだ。僕だって、杏さんを想ってはいけないと思ってるよ。でも、この気持ちを抑えることなんて無理だよ。今まで、こんなにも強く惹かれる人とは会った事がないんだ。同じ遺伝子を持つもの同士だとわかってても、この気持ちは全く変わらないんだよ」

私だって、同じだ。八雲先生と全く同じ気持ちでいる。だからこそ、顔を合わせたくなかった。

さつき、八雲先生が力強く抱いてくれたときのぬくもりを思い出した。やわらかく力強く私を抱きしめてくれた、温かい腕。ずっとそこにいたくなるくらいに、心地よかった。

目の前にいる八雲先生の腕を見る。その腕は、とても温かくもう一度、そこに行きたいと思ってしまうほど、男らしくたくましい。私は、いとおしそうにその腕を見てしまった。本当に、いとおしくてたまらない。

でも、もう二度とそんなことをしてはいけない。今度こそ、そこから出られなくなってしまう。

「先生、もう出て行ってくれませんか。一人になりたいんです」

何かを言いたそうな八雲先生の唇。しかし、何も言わず、八雲先生は力のない足取りのまま、部屋を出て行った。

愛の行方

八雲先生は、私がここにいることを知っている。

一つ屋根の下に暮らしているのだから、こんな日が来てもおかしくはなかったんだ。しかし、思った以上にその日は、早く来てしまった。まだ、心の準備も何もできていないのに。

私と八雲先生の間を知らずにいるのは、兄だけだ。他の人は、私たちの間に、恋愛感情があることを知らない。兄が、今の状況を知ったら、なんて言うだろう？ 優しく頭を撫でて、温かい言葉をかけてくれるだろうか。兄のぬくもりを想像しながら、この生活に耐えていこう。

何事もなかったかのように、私は奥園さんと一緒に、家の中を掃除する。ほこりひとつ残さぬように、丁寧に。業者が来るからと言って、手を抜くわけにはいかない。院長婦人の厳しい目があるのだ。特に慎重に行わなくてはならないのが、絵画や骨とう品だ。ここに来るまで、見たことがないようなものばかり。廊下や、応接間などに、そこにあるのが当たり前と言っているように、どっしりと飾られている。

それらに、ほこりがつかないように、毎日、丁寧に掃除をする。奥園さんと二人だから良いけれど、ここに院長婦人がいたらと思うと、手が滑ってつばを落とすことになるくらいに緊張してしまふ。

私が掃除したところは、奥園さんが最終チェックをする。今日も、奥園さんのチェックが入る。

「もう、私がチェックしなくても大丈夫なようね。明日からは、チェックするのは止めましょう」

奥園さんは、私が掃除した絵画などを見て、腕を組み、うんうんと頷いてそう言った。チェックのときは、優しい奥園さんでも厳しい目になる。その目で見て、お墨付きがついたんだ。明日からは、

チエツクなしになる。ほんの少しだけ、自信がついた気がした。

掃除を終えると、院長婦人に呼ばれて、院長婦人の部屋へ奥園さんと二人で向かった。掃除道具をしまい終わると、急いで向かった。院長婦人の部屋の前で、二人そろって立ち止まり、奥園さんがノックをすると、「どうぞ」と言う院長婦人の声が聞こえたので、奥園さんを先頭に入った。

中に入ると、院長婦人が、中央にある応接セットの豪華なソファに腰をおろしていた。その後ろで、腕組みをし、神妙な顔で立っている八雲先生がいた。

「まあ、座って頂戴」

やけに機嫌がよく、不気味な感じのする院長婦人に促されて、私と奥園さんは院長夫人の正面に座った。

「どうかしたんですか？ 奥様、今日は、とてもご機嫌でいらつしやるようですね」

「わかる？ 今日は、お二人に、おめでたいお話があるのよ！ 健太郎、いらつしやい」

奥園さんの言葉に、院長婦人の顔は一層朗らかになった。そして、後ろにいた八雲先生を手招きしてソファの横に立たせた。院長婦人は、立つてないで座るように促し、八雲先生は私の正面に座った。

「実はね、健太郎のお見合いが決まったのよ、フフ！」

目を細めて、笑顔を振りまく院長夫人。その横で、青白い顔をしている八雲先生。二人の対照的な顔。私も、素直にうれしい顔ができなかった。院長婦人が目の前にいることを考えると、ここは喜んだ顔をしなくてはならないと思い、強引に口角を上げ、目を細めて私は、拍手を送った。

「あら、ありがとう」

私の拍手に、院長夫人は初めてお礼を言ってくれた。

「奥様、お相手は、どんな方ですか？」

「それがね、製薬会社の社長令嬢なのよ！ 健太郎の写真を見て、

一目で気に入ってくださったの！ 今日の午後、こちらに来てくださるそうなの！ さつき、電話をいただいてね。今日、時間ができたから、ぜひ会いたいです！」

院長婦人と奥園さんは、八雲先生のお見合い相手の話で、大盛り上がりだ。私もその輪に加わるべきとは思っけれど、なかなかその輪には入れない。

ちらちらと、真正面にいる八雲先生を見ると、ずっと俯いている姿ばかり。下を向いて手を組んで、肩をかすかに動かしている。このお見合いを快く思っていないのが、その表情を見れば、誰だつて一目でわかる。

その理由が、私がいるからなのかと思うと心苦しくて仕方がない。八雲先生に向けていた視線を、ゆっくりと院長婦人の方へと移した。「健太郎。どうしたの？ こんなにうれしい話なのに、どうしたつて言つたのよ？」

さすがの院長婦人も、全く笑おうとしない八雲先生に痺れを切らしたようだ。上ずった声ではあるが、強い口調で八雲先生に言った。「僕は、結婚なんて……」

少し焦っているような小さな声で、八雲先生は、院長婦人に応戦していた。

「何を言っているのよ！ こんなに良い話なんて、他にはないわよ！ あなただつて、そろそろ結婚したつていい年でしょう？ 何を迷う必要がありますか！」

興奮している院長婦人。確かに、話を聞く限り、こんなに良い話はない。相手は、社長令嬢で、八雲先生を痛く気に入っている。喜びのあまり、時間が空いたからと言って、すぐに会いにきてくれるほどだ。八雲先生には、どうかこの結婚を喜んで欲しい。八雲先生の喜ぶ姿を見ることで、私も心からこの結婚を喜ぶことが出来ると思つから。

お昼前に、八雲先生のお見合い相手が来た。私と奥園さんは、車

寄せで待ち構え、お見合い相手である望月さおりさんを出迎えた。

社長令嬢と言うことで、やはり、リムジンで来た。運転手がリムジンのドアを開けると、望月さんが現れた。白く透き通る肌、清潔感のある白のワンピース姿、風になびくロングの黒髪がバラの香りを放っていた。品のある、とても女性らしい人だ。

望月さんと軽く挨拶を交わし、奥園さんが先頭にたつて望月さんを応接室に案内した。私は望月さんの後ろを歩いた。応接室には八雲先生が一人で待っていた。悲しげな表情を浮かべる八雲先生とは対照的に、望月さんは子供のようにはしゃいで八雲先生の方へと駆け寄った。

その光景を見届けると、私と奥園さんは応接室を後にした。

「小柄で、かわいらしい人ね」

応接室から離れ、調理場に行く途中の廊下で、奥園さんが微笑みながら思い出しつつそう言った。

「ええ、そうですね」

「八雲先生とお似合いだったわ。このお話が、うまくいくと良いわね」

奥園さんは、心底そう思っているのだろう。さつきから、ずっと笑顔を絶やしていない。

窓からさす光に照らされて、奥園さんの横顔が、よく見える。その顔は、わが子が結婚するような喜びに満ちていた。

こんなにおめでたく、うれしい話なのに、私はどうしても心から喜んであげることが出来ない。早く、吹っ切らないといけないって、毎日、自分に言い聞かせているのに、なかなか吹っ切れないでいる。

望月さんは、それからちよくちよく八雲先生に会いに来た。家だけではなく、病院にも顔を出しているようだ。八雲先生とは、ほとんど顔を合わせることはないけれど、院長婦人がうれしそうに大きな声で話しているのを、何度も聞いた。

八雲先生と一緒に食事時になると、決まって食堂で、院長婦人は

八雲先生に望月さんの話をする。八雲先生の声は、聞こえないけれど、院長婦人の声は甲高く、大きいので、調理場にいる私たちにまで聞こえたのだ。

「今日も、望月さんは八雲先生に会いに行ったのね」

「よほど、気に入っているんでしょう」

そんな話をしながら、調理場で奥園さんと話をするのが、習慣となってしまうた。

私自身、何も変わらない毎日を過ごしていた。朝起きて、奥園さんと合流して、朝食を作って、食べて、家中の掃除をして、洗濯をして。休みなんで、一日もない。ずっと、八雲家の中に続ける。庭に出るときだけが、外の空気を吸える瞬間だ。

自分の部屋は、地下の悲しい場所にある。誰もが、近寄りたがらないだろうと思われるような場所。そんなところに、夜、一人でいるのは想像以上に怖い。

お風呂やトイレに行くときは、薄気味悪い廊下に出なくてはならない。隣にあるとは言え、暗くひんやりとした空気が漂っている廊下に足を踏み出す怖さになれることはない。

私は、早めにお風呂に入り、早く寝るように心がけている。

今日は、早く夕食が終わったので、お風呂にも八時過ぎには入れた。お風呂は、リフォームしてあるのか、壁一面が白くて清潔なお風呂だ。小さなバスタブにお湯を入れ、肩まで入ると体の芯がぽかぽかと温まってくる。

ぬるめのお湯に、ゆっくりとつかると、なんだか疲れが全部抜けていくような気がする。極楽極楽といったため息が、毎日のように出る。

真っ白い壁を見ると、自分の心も真っ白になるような気がした。

お風呂から上がり、お気に入りの緑のパジャマに身を包み、ぬれた髪をタオルで拭きながら、急いで部屋に戻る。

ドアを開けると、ガチャリと大きな必ず音がする。この音を聞き、

中に入ろうとすると、信じがたい光景を目にしてしまった。ドアを開けたまま、ドアノブを軽く握り締め、髪を拭いていた手は止まった。あまりの衝撃に、どうしていいのかわからない。金縛りにあったことはないけれど、金縛りにあったかのように、私はその場で動くことができなくなっていた。

その私に気づき、ベッドに座っていた八雲先生が、すつくと静かに立ち上がると、私をまっすぐに見つめ、強く私を抱きしめた。「会いたかった」

私の耳元で八雲先生がささやいた。私の全身から力が抜けていくと、ドアが大きな音を立てて閉まった。

いけないと自分に強く言い聞かせ、私は八雲先生から離れた。

「どうして、ここに？」

「自分の気持ちを確かめるためだよ。やっぱり、ここに来てよかった。僕にとって一番大切な人は、君だと言うことがはっきりとわかったよ」

嬉しい言葉なのに、素直に受け入れることは出来ない。

八雲先生の言葉をかき消すように、急いで顔の手入れをはじめた。「あの結婚は断るつもりだ。愛のない結婚なんて、僕には出来ないから」

鏡越しに映る八雲先生の顔は、真剣だった。真剣なその視線から逃れるように、私は自分の顔だけを鏡の中で見ていた。

「先生と望月さんはお似合いですよ。こんなにいい話、他にはないじゃないですか」

八雲先生が他の女性と結婚すれば、私のこの思いだってきつと水の泡のように消えてなくなる。

顔の手入れを終えると、髪を解かし、ドライヤーをかけた。大きなドライヤーの音だけが聞こえる部屋。八雲先生は黙ったまま、鏡越しに私の顔を見続ける。それに気付きながらも、私は髪を乾かすことだけに専念した。髪が乾いたところで、私は八雲先生に体を向けた。

「もうここには来ないで下さい」

「それは出来ない。僕は、また、ここに来るよ」

そう言うと、八雲先生が部屋を出た。

ようやく八雲先生の熱い視線から解放され、疲れた体をベッドに静めようとしていると、枕元に小さな箱が置いてあることに気がついた。ベッドに座り、箱を開けてみるとダイヤの指輪が入っていた。箱の中に入っている小さな紙切れを広げると、

この指輪は八雲家のお嫁さんに代々受け継がれている指輪だ。次は、君の番だよ。

私の番？ 同じ遺伝子を持つ私たちは、決して結ばれてはいけなはずなのに。それよりも、そんなに大事な指輪を私に渡すだなんて。どうかしてる、八雲先生は。

早く、指輪を返さなくては。

急いで部屋を出て、一階に上がると偶然にも院長婦人と出くわした。

「こんな時間に何をしています？ 夕食が終わったんですから、自分の部屋から出ないでちょうだい」

院長婦人の鬼のような目に体がすくみ、そのまま自分の部屋へと戻った。

八雲先生と望月さんの結婚話は、着実に進んでいった。望月さんは、八雲先生をひどく気に入り、絶対にこの人でなければと言うほどだった。しかし、八雲先生は相変わらずで、望月さんとの結婚に良い顔をしてはいない。

「健太郎さん、結婚式のことなんだけど・・・」

そんなことを言つては、何度も望月さんはスキップを踏むように八雲家へと足を運んだ。私は、それを横目で見ていた。

望月さんが、色気のあるドレスを身にまとい、八雲先生と無理や

り腕を組んでも八雲先生の顔色が変わることはなかった。

二人が並んでいる姿は、美男美女で、とても似合っているのに。

「あの二人、お似合いだと思っただけだなあ。健太郎さんは、この結婚を望んでいないのかしら？」

庭を歩く二人の姿を廊下のガラス越しに見て、奥園さんが言った。ガラスの向こうの二人は、とつてもお似合いなのに、八雲先生は望月さんとくつつつこうとしない。それを必死に追う望月さんが、愛らしく見えた。

「ねえ、野高さん、あの二人、結婚するかしら？」

難しい質問をされてしまった。

「すると思いますよ」

軽く笑みを浮かべて、そう言った。

あの二人は、きつと結婚する。というより、結婚して欲しい。それが、私の願いだ。

どうか、結婚して、幸せな家庭を気づいてください。私は、ここでそれを見守り続けます。

その言葉を庭で逃げ回っている八雲先生に、無言でささげた。

エプロンのポケットの中には、いつでも返せるようにと大事なあの指輪が入っていた。しかし、なかなか八雲先生と二人きりになれず、いつまでたっても指輪はポケットの中から外に出ることはなかった。

奥園さんが、休みの日。

奥園さんは、家庭があり、大きな子供もいる。結婚したときや、子供を産んだときは、長期でここを休んだこともあったそうだが、子供が成人した今は、週五日、ここで働いている。

土日は、絶対に休ませて欲しい。祝日も休ませて欲しいと言うことで、土曜日である今日は奥園さんは休んでいる。

奥園さんがいないときは、絵画や骨とう品の掃除はしない。チエツクをする必要がないとは言え、奥園さんがいないと不安で仕方が

ない。

今日は、一人で朝食を作り、後片付けをし、掃除をしなくてはならない。洗濯だってそうだ。しかも、今日は八雲先生もお休み。その上、望月さんが、夕食を食べにやってくるそうだ。

八雲先生と奥園さんの休みが一致したのは、今日が初めてだ。今日こそは、あの指輪を返すことが出来る。二人きりになったら、すぐにあの指輪を返そう。

応接室の掃除をはじめると、八雲先生が中に入ってきた。今がチャンスだ。私の方へと近づいてくる八雲先生。私は、エプロンのポケットから指輪を取り出した。

「これ、返します」

八雲先生に指輪を差し出したが、八雲先生は受け取ってはくれない。

「その指輪は、君に持っていて欲しいんだ。僕の一番大切な人に持っていて欲しいんだよ」

優しく潤んだ瞳で私を抱きしめると、今度は私の体を抱きしめた。温かい八雲先生の体温を感じた。許されない恋なのに、とても居心地のよい場所。

突然、応接室の扉が開いた。

私の背筋は、凍りつき、そちらを見るのが恐ろしくなった。一体誰が来たと言うのだろうか。

「何してるのよ。……何してるのよ！」

怒鳴り散らす声に、私は、ひとつ息を飲み、そちらを向いた。扉の前には、仁王立ちの望月さんがいた。鬼の形相で、私をにらんでいる。それでも、八雲先生の手は離れない。

「わかっただろ。僕が、君との結婚を望まない理由が。僕たちは、愛し合っているんだ。他の人と結婚する気はない」

はつきりと言いつつ八雲先生。望月さんは無言で、扉を閉めずに出て行ってしまった。

とうとう、兄以外の人に、私たちの関係がばれてしまったのだ。

しかも、望月さんに。八雲先生のフィアンセに。これは、ただではすまないだろう。

力が抜けたかのように、八雲先生の体が離れた。近くのソファに、ドシンと音がするほど乱暴に座り、八雲先生は頭を抱えた。

「ごめん。本当に、悪かったよ。とつさに、あんなことを言ってしまった。本当に、彼女とは結婚する気はないんだ。だからと言って、正直に君との事を話してしまうなんて。申し訳ない……これから、どうなるかはわからないけれど、僕が君を守るから。何があっても、僕が君を守るよ」

力のない目で、私を見て、八雲先生は言った。その瞳に力は感じられなかったけれど、心は感じられた。

いつか、こうなることはわかっていたはず。自分自身、それを覚悟していたはず。一度でも、八雲先生を愛してしまったのだから。そして、八雲先生を激しく私を愛したのだから。

「先生、私はどうなったってかまいません。それは、私がクローン人間だと聞かされたときに、覚悟していたことです。先生は、ご自分を大切にしてください。私のことなんて、守らなくていいんです」

八雲先生は、顔を赤らめ、ソファから立ち上がると、私の目の前に立った。

「僕は、君を……」

「ここを出てください。掃除の邪魔です。早く、出て行ってください。お願いします」

私は、目を潤ませ、涙声で八雲先生に訴えた。根負けしたのか、八雲先生は肩を落として出て行った。

応接室の掃除が終わり、廊下を歩いていると、頭に血を上らせた院長婦人と望月さんが、バタバタと走って私のところへやってきた。すでに、望月さんは八雲先生とのことを話したに違いない。さつき、望月さんが応接室を出たあと、院長婦人と話をしていたのだら

う。

「野高さん！ 聞きましたよ。あなた、なんて事をしてくれただんですか！ しばらく、自分の部屋から出ないように！ わかったわね！」

火山が噴火したように見えた。それくらい、すさまじい怒りを院長婦人は、私にぶつけたのだった。

望月さんも、私に鋭い眼光を突きつけた。それが、胸に突き刺さり、私の胸はひどく痛んだ。

言われたとおり、私は、すぐに、自分の部屋に戻り、自分の部屋から出ないことにした。

院長婦人は、「しばらく」と言っていた。それは、どういう意味だろう？ 「ずっと」と言うのなら、わかるけれど、なぜ、「しばらく」なのだろうか。

対応を決め次第、ここを出て、何かしらの処分が下されるのだと思う。

どんな処分が下されるのか。

私は、唯一の八雲先生のクローン人間なのだから、殺されると言うことは考えられない。だとしたら、一体、何をするのだろうか？

二度と、八雲先生に会わないようにするとか。でも、それは可能なことなのだろうか？ 八雲先生の身に、何かがあったときには、私の体が必要になるのだから。

全く想像がつかない。しかし、未恐ろしい。冷や汗が、私の背筋を伝った。

他に何もすることがなくなり、自分の処分のこと気がなくなって仕方がない。薄暗い電灯に映し出された、黄ばんだ壁をじっと見つめては、処分のことばかりを考えていた。

処分

八雲先生とのことが、院長婦人の耳に入ってから数日後、私の処分が下された。久しぶりに、自分の部屋から出て、院長婦人の部屋に行った。どうやら、そこで、私への処分が発表されるらしい。

奥園さんが来る前の、朝の早い時間に、私は呼ばれた。

院長婦人の部屋には、院長夫人と凍りついた表情の院長が並んで座っていた。

「座って」

院長婦人に促され、私は、ソファに座った。鼓動が高鳴り、心臓が破裂しそうだ。

私がソファに座ると、院長夫妻は、死んだような顔でこちらを見た。

「あなたは、とんでもないことをしました。それは、わかっていますね？」

「はい」

強制されたように、コクリと頷いた。院長婦人のあまりの迫力に、そちらを見られなくなった。

「あなたには、ロボットミーを施します。一週間後、それを行います」平坦な口調で、淡々と院長婦人は語った。

「ロボットミー？ 聞いたことのない言葉。施すと言っていたけれど、何がなんだか、全く見当がつかない。ロボットかなんかなのか？」

「あの……、ロボットミー？ って、一体、何ですか？」

私が、恐る恐る質問をすると、院長がその口を開いた。

「私が説明しよう。ロボットミーとは、前頭葉を傷つけ、感情を抑制する手術のことだ」

院長は、あまり気の進まない言い方をしていた。

「それをしたら、私はどうなるのでしょうか？ そして、それは誰が執刀するのでしょうか？」

私は、少し前のめりになり、院長に質問を投げかけた。青ざめた表情の院長は、少し間を空けて重い口を開いた。

「まず、それは私が執刀する。その手術を施したあと、野高さんが、どうなるのかは、はっきりとはわからない。ただ、可能性としては、下界のことへの興味を失うだろうということだ」

院長が、自ら執刀する。ただ、院長は、脳外科医ではない。ロボットミーが、どんな手術なのか、詳しいことはわからないけれど、院長は内科医なのだから、このような手術をするのに適当なのかは、かなり疑問だ。

「わかりましたね。一週間後に、ロボットミーの手術を行います。それまでは、自分のへ……」

突然、扉が勢いよく開かれた。そこには、肩で息をし、血眼になった八雲先生が立っていた。

「母さん！ 今、なんて言ったんだ？ ロボットミーだって？ なぜ、彼女にそんなひどいことをするんだ！ 彼女が、クローンだからか？ 僕のクローンだからって、彼女に人権はあるんだぞ！」

部屋の中に入ると、八雲先生は興奮して院長夫人の胸倉をつかんだ。いつもの優しい目はそこにはなく、怒りに満ちた瞳を吊り上げ、母親である院長婦人を殴りそうな勢いだ。すぐに、院長がそれを静止しようと八雲先生の腕をつかんだ。

「止めなさい！」

「父さん！ どうして、彼女にそんなことをするんだ？ 人道的に問題がある手術じゃないか。こんなこと、するべきではない。まして、彼女は、精神的に何か問題があるわけでもないんだ。そんなことをする必要なんて、全くないはずだろう？」

潤んだ目で、必死に院長を説得をする八雲先生の姿に、ロボットミーがただならぬ手術である気がした。一週間後、それを施したら、私は、どうなってしまうのだろうか？ そう思うと、体が小刻みに震え出した。

「もう決めたことだ」

「父さん！ こんなこと、止めるんだ！」

八雲先生は、泣いて顔をぐしゃぐしゃにしながらも、ロボットミーを止めるように説得し続けた。しかし、院長夫妻は決して首を縦に振ることはなかった。

なぜ、八雲先生はあれほど、必死に説得をしていたのだろうか？ そんなに危険な手術なのだろうか？ 脳を傷つけるらしいから、危険なのかもしれない。人道的にと言う言葉が出てきた。それほど、ロボットミーで人格が変わってしまうのだろうか？ いろいろなのが頭をよぎる。疑問だらけで、頭の中がいつぱいだ。

薄暗い部屋に一日中いるのは、退屈な以上に精神的に弱くなっていくのを感じる。私が何もしなければ、物音ひとつしない。誰かがくれば、廊下から足音が聞こえるくらいで、この部屋には静寂しかない。

ベッドに座ったり、椅子に座ったり。たまに、トイレに行ったり、夜になればお風呂に入ったり。

そして、一日三食、きちんと食事が用意される。届けてくれるのは、院長か院長夫人のどちらかだ。決して、八雲先生が運んでくることはなかった。

朝食のおにぎりを食べ終え、お皿を机の上に置いた。昼食を届けに院長婦人が来たときに、このお皿を下げる。毎日、その繰り返し。

今まで、一度も机の引き出しを開けたことはなかった。今日は、無性に引き出しが気になって仕方がない。机の引き出しを開けてみると、折り紙が入っていた。机の一番上の引き出しに、ビニール袋に入れられた百枚入りの折り紙があったので、それを机の上に出した。なぜ、ここにこんなものが入っているのかはわからないけれど、折り紙を開けようと裏返してみると、まだ誰も開けた事がないよう

だ。

丁寧に、ビニール袋から折り紙を取り出し、広げては一枚一枚を確認するようにじっくりと眺めた。金と銀がちゃんと入っている。赤や黒や青や黄色。子供のころも、よく折り紙で遊んでいたっけ。両親は、兄につきつきりだったから、私は折り紙をわき目も振らずに折っていたんだ。折鶴や、やつこさん、はかまだって作った。懐かしいな。今でも、覚えているかしら？

遠い記憶を頼りに、やつこさんとはかまを折ってみた。やってみると、意外と簡単に出来上がってしまった。小さいころに、よく折り紙で遊んでいたせいだろう。昨日のこのように思い出し、こんなにも簡単にやつこさんとはかまが出来上がってしまった。

次は、折鶴を折ろう。これは、よく折っていた。千羽鶴を一人で作ったことだってある。兄が、手術をするたびに、私はひたすら鶴を折っていた。千羽折れば、手術が成功して、兄の脚が治ると信じていたからだ。兄の脚が治ったら、公園で思いっきり一緒に駆け回りたいて思っていた。千羽折っても、その願いは通じなかったけれど。

折鶴をひとつ完成させ、机の上にぽんと置いてみた。やつこさんにはかまを穿かせ、鶴の隣に寄り添うように置いてみた。友達ができたみたいだ。それだけの光景に、懐かしい記憶がよみがえり、心が少し和やかになった。

誰かが、ここへやってくる。廊下から、足音が聞こえてきた。コツコツと不思議なくらいにゆっくりとした足取り。幽霊でも出るのではないかと思うほどの恐怖を感じた。本当に、幽霊が出るのではないかと思いつつ、私は折り紙から手を離し、扉をじっと見つめた。その足音は、ぴたっとこの部屋の前で止まった。

勢いよく扉が開くと、望月さんが鬼のような顔で、勇ましく部屋の中へと入ってきた。殺気を感じるほどの強い視線で、私を威圧すると、何も言わず、椅子に座っている私の前に立ち止まった。私は、何がなんだかわけがわからないまま、立ち上がると、突然、望月さ

んに頬を思いつきりひっぱたかれた。顔が、ちぎれるのではないかと思うくらいに強く叩かれた。

「あなた！　なんて事をしてくれたのよ！　健太郎さんったら、あなたのことばかり考えているのよ！　せつかく、私と一緒に暮らしてくれただのに。あなたの心配ばかりして！」

泣き叫びながら、望月さんは言った。

私が、この部屋にいる間に、八雲先生と望月さんは一緒に暮らし始めていたのだ。結婚をするのだから、おかしいことではない。少しだけ、シヨックだったけれど、私の中ではあきらめがあったのか、あまり大きなシヨックではなかった。

「先生と一緒に暮らしていたんですね」

「そうよ！　なのに、なのに……。ねえ、健太郎さんの心を返してよ！　あなたたちは、結ばれることなんてないんだから。」

私には、健太郎さんしかいないのよ。だから、お願いよ。あの人の心を返して！」

望月さんは、涙を拭った。鼻をすすり、目を真っ赤にして私をにらみつけると、立ちすくんでいた私を床に力いっぱい叩きつけた。

腕が折れてしまうのではないかと思われるくらい、私は床に強く叩きつけられた。

「何よ、あんたなんて、クローンのくせに」

望月さんは残酷な目で、私を見下した。

クローンのくせに

何も返す言葉はない。

院長婦人以上に恐ろしい顔。その視線に縛り付けられ、私は身動きがでずにいた。

「ロボットミイの手術を来週行っなんて。すぐにでも行ってしまえばよかったのに」

震えた声で、望月さんが言った。

「理由はわかりませんが、来週の今ごろ、私は今の私ではなくなっているんです。私が変われば、先生のお気持ちも、きっと変わるで

しょう」

「そうだと良いけれど……。私が、何をしても健太郎さんは上の空。私が健太郎さんを抱きしめたって、私を抱きしめてはくれないのよ！　あなたみたいに、強く抱きしめてなんてくれないんだから。料理を作ってあげても、何も言わず、悲しそうな目で食べるだけ。健太郎さんが、口を開いたと思ったら、あなたの名前ばかりが出てくるのよ。いつだって、健太郎さんは私とあなたを比較しているのよ。何をしたらって、あなたのことが頭から離れないのよ」

目から大粒の涙を流しながら、私を怒りとも羨んでいるとも取れる表情で見ている。

張り詰めた空気の中、望月さんは何も言わずに扉を勢いよく開けて部屋を出て行ってしまった。その後姿は、悲しみに満ちていた。廊下を歩く望月さんを私は部屋の入り口から見守った。

痛い。心が痛くてたまらない。

床に座り、私は望月さんの言葉を思い出した。八雲先生は、望月さんを受け入れてくれない。それどころか、今も私のことを想ってくれている。その気持ちは、うれしいけれど、来週には私は私でなくなってしまう。どうなってしまうのかはわからないけれど、今の私でなくなることだけはわかる。きつと、来週の今ごろには八雲先生の心が変わっているはず。私には祈ることしか出来ないのだ。

それから私は、無心で折鶴を折り続けた。折り紙は、すぐになくなってしまう。机の引き出しをもう一度開けてみると、一番上の引き出しの奥に紙でできた箱があった。それを取り出してみると、折り紙と書いてある。中を開けてみると、大量の折り紙が出てきた。何枚あるかはわからないけれど、私はそれを使って、折鶴を折り続けることにした。

ベッドの上には、折鶴がたくさん並べられていた。整理しているのではなく、無造作に置いてある。まるで、ここが自分たちのベッドだと言わんとばかりに、折鶴たちは堂々と並んでいた。

この日の夕食は、院長が運んで来てくれた。夕食を置き、昼食のお皿を下げて、すぐに出て行くと思っていたのだが、院長はすぐに出て行かなかった。院長は、ベッドの上にある大量の折鶴に驚き、しばらく呆然と見ていると、「箱を持ってこよう」と言って部屋を出ると、すぐに大きな段ボール箱を持ってきては、院長自らベッドの折鶴を全部その中に入れてしまった。

「院長、すみません……」

あまりの手際のよさに、じつと見入ってしまい、何もできなかった。私は、院長に一言謝ったが、院長は目を細めて笑ってくれた。

「良いんだよ。私が、好きでやったのだから。それより、ちよつと良いかな？」

院長は、そう言うと片付いたベッドに座った。私は、椅子に座り、院長の話を聞くことにした。

「どうかしましたか？」

「いやあ、あの……。明日は、午後から家内が出かけるんだ。家内が出かければ、奥園さんだけになるんだが、私は早めに帰ろうと思う。表の門には、防犯カメラもあるし、そこから出るのは危険だ。調理場の近くにある勝手口からなら、容易に出られるだろう」

院長は、心細いのか小声で、私にそう語った。

「杏さん、私はこんなことをしたくはないんだ。だから、逃げて欲しい。明日が、絶好のチャンスだ。良いね」

私に確かめるように、院長は言った。

「お気持ちとは、とてもうれしいのですが、私は逃げません」

私が断言すると、院長は口をぽかんと開けて驚いた。急いで、ベッドから立ち上がると、私の肩をつかみ強くゆすった。

「何を言っているんだ。ここにいたら、来週の今ごろには……」

院長は、言葉を濁した。恐ろしいことを想像したに違いない。し

かし、私には覚悟はできている。

「もう覚悟はできてますから。それに、これが最善だと思うんです。私は、専門家じゃないから、ロボトミーのことは、詳しいことまでわからないけれど、今、とてもつらいんです。その手術を行うことで、この辛さが和らぐのなら、その方がいいと思うんです」

「辛い？」

院長は、落ち着きを取り戻したのか、ベッドにまた座った。

「私と、健太郎さんは結ばれない。結ばれてはいけない関係です。今のままの感情を持ち続けていては、ずっと健太郎さんを想ってしまつかも知れません。それは、私にとって一番の苦痛なんです。健太郎さんを忘れることができるのなら、感情なんてなくなってしまうほうがいい。そして、健太郎さんのためにもそれが最善の方法だと思うんです」

私の話を静かに、腕組みをして、院長は聴いていた。瞳を閉じて、うんと頷くとその瞳を静かに開いた。

「杏さんには、本当に辛い思いをさせてしまったようだね。しかし、杏さん一人の問題ではないんだ。第一、ご家族のことはどう思っているんだね？」

「家族」と言う言葉に、私は衝撃を覚えた。ずっと、家族のことは考えないようにしていた。今ごろ、私のいない生活を送っている家族のことを。両親は、どんな気持ちでいるのだろうか？ 兄は、一人でちゃんとパン屋に通っているだろうか？

考えたくなかったことが、一気に押し寄せてきた。家族のことを考えると、悲しみで心がいっぱいになる。

でも、そんなことを言っただって、どうしようもないんだ。私は、クローンとしてその役割を果たさなくてはならないと思う。

「家族のことは、言わないで下さい。……そうだ、院長、お願いがあるんですけど」

家族と言われ、私は一つ心残りなことがあることに気がついた。院長になら頼むことが出来る。他の人には決して頼めないことだ。

「何だね？」

「大変、申し訳ないんですが……私の家にあるアルバムを取りに行っていただけじゃないでしょうか？」

あつかましいお願いだとは、わかつていた。それでも、急にアルバムが見たくてたまらなくなったのだ。今一度、この目で、思い出を確かめたくなった。小さいころの思い出、大人になってからの思い出。全てが記録されているアルバムを、できることなら、この目で、最後に見ておきたいと思った。

「わかった。しかし、それよりもここから出て行ったほうがいい。これ以上、君や君の家族から築き上げたものを奪いたくはないんだ。それに、杏さん、君は私と血が繋がっているんだ。クローンとは言え、君の体には私たちの血が流れている。娘だと言ってもいいわけだ。そんな君に、自ら手を出したくはないんだ」

今にも泣き出してしまいそうなくらいに、院長は顔をくしゃくしゃにした。

「娘」と言ってくれた。私のことをそこまで思っていてくれていたんだ。もう、それだけで十分だ。

「何のために、私を作ったんですか？ 息子である健太郎さんのためでしょうか？ いまさら、そんなことを言ってもいいんですか？」

「良いんだ。私自身、このことはあまり気が進まなかったんだ」

そう言うと、院長はクローンを作り出した経緯を説明した。

八雲先生がこの世に生を受け、子宝に恵まれなかった院長夫妻は、とても喜んだと言う。院長の母親から、何度となくきつい言葉を浴びせられ続けた院長婦人も、泣いて喜んだそうだ。

しかし、院長婦人はあまり八雲先生の子育てには参加させてはもらえなかった。奥園さんもそのことは言っていた。

院長婦人は、喜んで八雲先生を育てようと思っていた。その気持ちを知ってか、知らずか、院長の母親は自分の子供のように八雲先生をかわいがり、奥園さんに預けていたと言う。

院長婦人の母親は、八雲先生は心臓が弱いことから、子育て経験

者である奥園さんと自分が育てた方が良いといって、院長婦人に八雲先生を抱かせたがらなかつたらしい。

そして、院長婦人に二人目を産むように言うようになった。

自分のおなかを痛めて産んだ子供を抱けず、毎日、泣き続けていた院長婦人に、病魔が襲った。子宮ガンだ。気がついたときには、子宮を全部摘出しなければならぬ状態になっていたと言う。卵巣まで失い、二人目は絶望的になった。

院長婦人の子宮を摘出すると、クローンを作ろうと院長婦人は言い出し始めた。二人目を産むことは、もうできない。ならば、あの子のクローンを作ろうと。八雲先生に何かあったときのためにも、クローンを作るべきだと。

院長は、最初は反対した。強く反対していたのだが、院長の父親にその話が伝わると、院長の父親は、二つ返事で賛成したと言う。

院長の父親は、産婦人科医。院長と二人で、クローンを作ることにした。

そのためには、子宮が必要だと言うことで、私の両親に白羽の矢が立ったと言う。両親は、最初こそ断っていたのだが、最終的には承諾し、私が生まれた。

院長夫妻は、女の子である私が生まれたので、裏切られたと思っただろうだ。そして、両親を痛烈に非難したらしい。しかし、両親は院長たちに言われたとおりにしたと言い、しっかりと検査をして欲しいと申し出た。そこで、本当にクローンであるかどうか、徹底的に検査をした。そして、どこをどう検査しても、私は八雲先生のクローンとしか考えられないと言う結論に達した。

院長婦人は、私が成人するまで大事に育てるように両親に約束したと言う。しかし、成人したあとも、私の両親は私を手放そうとはしなかった。

それでも、自分たちの病院の近くに住んでいるという事もあり、強引なことをすることはなかった。

私が、交通事故で、偶然あの病院に入院することになり、この夕

イミングで引き渡してもらおうと言うことになった。

「それで、突然、私に全てを話してくれたんですね」

うなだれながら話す院長に、私は話し掛けた。気がかりだったことが、全て明らかになった。そして、院長婦人は想像以上に、辛い経験をしているということも。

「だけど、なぜ、私にロボットミーのことを話したんでしょうか？」

これだけは、どうしてもおかしいと思った。私にそのことを話せば、私がここから逃げることも考えられる。それに、一週間の猶予まである。どう考えたって、おかしいではないか。

「私が、話そうと言ったんだ。どうしても、君には逃げてもらいたいと思ってるね。ロボットミーを施すことを言い出したのは、家内の方だが」

握りこぶしを作り、肩を震わせながら院長が言った。

「院長は、手術を行いたくないと言うのなら、なぜ、反対しなかったんですか？」

「……反対は、したんだ。しかし、家内はどうしても駄目だと言った。これを拒めば、家内の実家からの援助を一切断ち切ると言われたんだ。そんなことをしたら、あの病院から産婦人科や小児科、救急医療がなくなってしまう。これら三つの科は、赤字なんだ。家内の実家の援助があつてこそ、やっていけているんだ。その援助がなくなつたら、患者たちはどうなる？ 困っている患者は、たくさんいるんだ。患者たちのためにも、そんなことをするわけにはいかない」

院長は、声を詰まらせた。あの病院には、産婦人科も小児科もある。最近では、どちらも数が少なくなっているとか。そのどちらも問題なく、医師も看護師も十分に確保してやっているんだ。それは、院長婦人の実家からの援助があるからこそできていた。

「それに、私がやらなければ、父が行うと言っていたんだ。父は、院長の座を退いたとは言え、まだまだ現役で医師を続けているんだ。だから、私が断つても意味がないんだ」

院長は、今にも泣きそうな顔をしている。

「私には、何の力もない。だから、こんなことくらいしかできなくて。本当に、申し訳ない」

そう言うと、院長は私に深々と太ももに鼻がつきそうなくらいに頭を下げた。

「謝らないで下さい。これは、運命なのですから。それより、さっきのお願いをどうか聞いてもらえませんか？」

しばらく頭を下げていたのだが、院長は、ゆっくりと頭を上げて、私を虚ろな目で見た。

「本当に、いいんだね？」

静かに、私は頷いた。

アルバムは、次の日、すぐに届けられた。院長から、アルバムを受け取ると、私はすぐにそれを机の上に広げた。懐かしさがぎゅぎゅと詰まっている。初めて旅行に行った箱根の写真や、野球が好きな兄のために、家族そろって東京ドームに野球を見に行ったときの写真、私の成人式の写真までである。

院長は、私の横で、アルバムを覗き込んでいた。私は、隠したりせず、院長にも見えるようにアルバムを広げた。

「幸せだったんだね」

「ええ。兄は、私にとっても優しくしてくれました。幼い私が、泣いて帰ってくると、兄は私の頭を撫でてくれたんですよ」

無意識に、懐かしい家族の思い出を話していた。すぐにまづいと思ひ、院長を見上げると、院長は複雑な表情を浮かべていた。

「気にしないで下さい。今では、兄も結婚して離れて住んでいますし」

すぐに、アルバムに目を落とし、焦りながら言った。かえって、院長を心配させてしまったような気がした。

「いい家庭に恵まれたんだね。実は、アルバムを取りに行った時に、ご両親に口ボトミーのことを言ったんだよ。大変、悲しまれていた

よ。あまりにもひどすぎると、怒鳴られてしまったよ。どうか、それだけは止めて欲しいと、泣きながら言われてね。ご両親は、本当に杏さんを思っていていらっしやるんだね」

苦笑しながら、院長は話してくれた。

両親の耳に、ロボトミーの話が入ってしまったんだ。できることなら、言わないで欲しかった。両親には、私はここで幸せに暮らしている、思っていて欲しかった。

「今は、家内もない。私は、奥園さんとゆっくりと私の部屋で話をしようと思う」

院長は、そう言つと、私の肩に手を置き、何か念を押すかのようにその手に力をこめた。とても温かい手。八雲先生の手を思い出してしまった。

そして、院長は何も言わずに部屋を出て行ってしまった。哀愁のある背中。そこには、強い願いがこめられているように感じた。

きっと、私に逃げて欲しいのだろう。そうでなければ、あんなことと言わないはず。これが、院長先生なりの親としてのやさしさなのかもしれない。

私が、手術を受けることで、みんなが幸せになるんだ。それに、私がこの世に生まれてきたのは、八雲先生を助けるため。それを全うしないといけないんだ。

来週の今ごろは、このアルバムを見ても何も思わなくなっているのかもしれない。

その日は、あつという間に訪れた。

目覚し時計をかけたたりしなかったけれど、やけに早く目がさめてしまった。時計を見ると、まだ午前五時。ベッドから出ると、いつもと変わらず、顔を洗った。普通に顔を洗おうと思っっているのに、その手が震えているのがわかった。石鹸で、うまく泡立てようとするのに、手が震えてうまくいかない。石鹸は、するりと私の手からすぐに落ちてしまう。石鹸を拾って、また、泡立てようとするけれ

ど、すぐに石鹸は床に落ちてしまった。何とか泡が立ち、それを顔中に塗るけれど、謝って目に泡を入れてしまいそうになった。昨日までは、こんなことはなかったのに。

直前にそれが迫り、私は急に怖くなってしまったみたいだ。いつも以上に丁寧にする、タオルを強く自分の顔に押し当てた。何とか、顔を洗い終えて、自分の部屋でそのときを待つことにした。ベッドに座り、ベッドの脇においてある段ボール箱に入っている自分で折った鶴をじっと見つめた。

突然、騒がしい音が聞こえてきた。とうとうその時が来てしまったようだ。私は、迎えが来るのを待った。扉の奥をじっと見つめて、足音が近づいてきた。静かな廊下から、足音がこだまする。私は、固唾を飲んで、扉が開くのをじっと待った。鼓動が、どんどん早くなる。そして、恐怖心もどんどん高まっていく。どうせなら、早く済ませて欲しいとさえ、思うようになってきた。

扉が開き、私は一度、目を瞑った。そして、ゆっくりと眼を開けると、見知らぬ男性がいた。

院長が、極秘で行うはずなのに、どうして違う人が来たのだろうか？ 不思議に思っただけその男性を見ていた。

「野高杏さんですね。署まで、ご同行願います」
知らない男性が、冷静な表情を崩さず言った。

わけがわからないまま、男性に腕をつかまれて、私は部屋から出された。

「一体、どういうことですか？」

腕を強くつかまれたまま、私は男性に尋ねた。

「実は、あなたのご両親から通報がありましたね。あなたが監禁されていると言われました。それに、あなたがクローン人間であるとまで言っていましたね。詳しいことを署で、聞かせて欲しいんですよ」

両親が、通報した？

信じられなかった。私が、クローンであることを警察に言ってし

まったのだ。そんなことをしたら、両親はどうなってしまうのだろうか？ クローン人間を無理やりではあるが、産んでしまったんだ。私のために、両親は自分たちのことを省みずに、通報したのだろう。階段を上ると、そこには、抵抗する院長婦人がいた。警察官が手をこまねいている。

その後ろには、観念したのか肩を落とす院長の姿があつた。そして、玄関には八雲先生の姿が。八雲先生も警察署に連行されるらしい。

静かに、私は警察官に連れられて外に出ようとする、玄関にいた八雲先生が、私に話し掛けてきた。

「杏さん。よかったよ。これで、君の身に危険が及ぶことはないだろう」

安堵の表情ではあるが、その瞳の奥には、悲しみが見え隠れしていた。

「どうして、ここに？」

「両親を止めようと思ってね。でも、その前に杏さんのご両親が、助けてくれていたようだ」

いるはずのない八雲先生に、質問をすると、八雲先生は私をじつと見つめて私の質問に答えてくれた。いつもの優しい瞳で、声で。

外に出ると、覆面パトカーが何台も止められていた。それらを珍しそうに眺め、私は一番後ろの車に乗った。一番前の車に院長が乗り、次の車に院長婦人、その後ろの車に八雲先生が乗った。

後部座席に警察官と並んで座った。なんだか、妙な気分だ。

空は、いやみなくらいに青く晴れ渡っていた。まぶしい光が、車内に入り、それに面食らっていると、車は静かに動き出した。

無言の車内。私は、外に目をやらず、下を向いていた。

私は、両親は、みんな、これからどうなってしまうのだろうか。みんな、離れ離れになってしまうのだろうか？

私と八雲先生は、二度と会うことはないのだろう。さっき交わした言葉が、最後の言葉になると思う。同じ歯車を持っているのだから

ら、また、会えるかもしれない。なのに、私はあの言葉が、最後のよな気がしてならない。

八雲家の門を出ると、私は顔をあげた。前の車両の後部座席にいる八雲先生が見えた。八雲先生の後頭部を見ていたら、八雲先生との思い出が、走馬灯のようによみがえってきた。

初めて会った日のこと、初めてのデート、その腕のぬくもり、腕も唇も全てを。

あんなに医者嫌っていた私が、ここまで医者である八雲先生に心を奪われてしまうなんて。こんな自分を嘲笑った。

小さいころから、医者はみんなうそつきだと思っていたのに。全く医者信用なんてしていなかったのに。パン屋のはす向かいのクリニクの先生のことだって、好きにはなれなかったのに。

もう一度、ゆっくりと八雲先生と初めて会ったときのことを思い返した。

鋭い日差しの中、ふと窓の外を見た。車は、少し広い通りを走っていた。両サイドには、街路樹が等間隔に植わっていた。まだ、朝早いこともあって、人影はほとんど見られない。

朝もやの中、信号が赤に変わり、車が止まった。

私は、相変わらず外を見続けていた。交差点の角に、パン屋があった。もちろん、私が以前勤めていたところではない。こじんまりとした、とても小さなパン屋だ。あのパン屋の目玉商品もクロワッサンだったらと祈っていた。

今ごろ、兄夫婦は、どうしているだろう。まだ、夢の中にいるのだろうか。

信号が青に変わると、車はゆっくりと進みだした。

同じ速度で、四台の車が並んで走っている。外から見たら、異様な光景に見えるのだろうか。

スーツをビシッと着た警察官に囲まれて、私が肩身を狭くしている。そこには、会話などない。無機質な空間の中、警察官越しに見える窓から外の景色を私は見ていた。

視線をもう一度、正面に向けた。そして、八雲先生の後頭部をじっと見つめた。決して振り返ろうとしない八雲先生に吸い込まれるように。心の中で、素直な気持ちをつぶやいた。「あなたのことが好きです」と。

周りの景色に目を向けることなく、鋭い日差しを浴びながら、一生、その姿を目に焼き付けるかのように、まっすぐに正面を見続けた。

処分（後書き）

以前あるコンテストに出して落選した作品を少し直してみました。よろしければ、感想を聞かせてもらえたらと思います。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9334b/>

二つの歯車

2009年5月16日18時01分発行